

生活意識の現状－全体的生活満足感と居住環境の捉え方

石塚 優

はじめに

生活意識に影響が大きいと考えられる社会的背景は経済的側面である。他には「衣食住余暇満足度」「仕事の魅力」等の関連が高いと考えられる。これらの要素は生活意識の中でも「全体的生活満足感」と関連性が高く、さらに生活意識の中の「生きがい」との関連が強い要因として、「仕事の魅力」など仕事に関連する「職場の人間関係」「仕事の社会的貢献度」などが予測される。特に不安定な雇用や賃金の低下は「生活向上感」の低下、「生活不安定感」の上昇などにより、「全体的生活満足感」への影響が大きいと考えられる。この点に関しては、1990年代に下記のような大きな変化が認められ、全体的生活満足感への影響が大きいと考えられる。このような視点から、変化する社会的背景の下で全体的生活満足感との関連で「市の捉え方」について、調査結果を基に検討・考察する。

1 経済的側面の変化

1990年代からの不況は高度経済成長期以降も含めて、これまでに経験したことのない影響を多くの人にもたらしている。その第一は賃金の低下である。これまで、毎年賃金は上昇するはずであったが、賃金の切り下げが現実となった。第二は日本的経営といわれた、年功序列、終身雇用、福利厚生が保障されず、40歳代、50歳代での解雇や離職が増加し、この年代を対象とした賃金切り下げが実施されるようになった。第三に就業形態の多様化である。

2 就業形態の多様化

雇用に関する一連の法律としては、労働基準法（1947年）、男女雇用機会均等法（1985年）、改正男女雇用機会均等法（1997年）、改正労働基準法（1999年）、改正男女雇用機会均等法（2006年）等がある。これらの法律は男性労働者の保護規制（8時間労働）や女子労働者の深夜業禁止から、男女平等を推進するための女子保護規制の撤廃や、女性の深夜労働の制限撤廃（1999年の改正労働基準法）などへと改正されるとともに、性別を理由とする差別の禁止（性別職務分離）や事業主の雇用管理上の措置義務としてセクシュアルハラスメントの防止、妊産婦の母性健康管理などの義務を含む内容へと変化している。

また、労働者派遣法（1986年）は、基本的考え方として専門的業務、もしくは特別の雇用管理を要する業務に限定して、労働力需給を迅速に結びつけるための派遣を認める内容であった。当時はOA化を進めるために自治体や企業が特別の雇用管理の下でSE等の派遣を必要とした。そのため適用対象業務を限定し、派遣期間にも一定の規制を設け、派遣による常用雇用の肩代わりを制限した。しかし、1996年、1999年と改正を重ねるに従い対象業務は拡大し、2003年改正時には、1999年改正では対象業務から外されていた「製造」業務を対象業務に含める規制緩和が行われた。派遣期間も最長1年から3年に延長され、

拡大した対象業務で働く不安定な派遣労働者にとり、多少の安定をもたらす反面で、派遣労働者の長期雇用が常用雇用を抑制する働きが強くなるという問題を同時に含んでいる。

このため、今日、女性のみならず、就業形態の多様化が認められる。職場には正規社員の他に派遣社員、契約社員、パートタイマー、アルバイト、請負社員、業務請負、再雇用など多様に存在し、派遣社員の3年、契約社員の1年更新で更新回数の制限付きなどの有期労働者が混在する。職場の中で「派遣さん」「請負さん」などと呼ばれる雇用区分が存在するのである。労働者派遣法は2012年に改正された。

3 就業形態の多様性と今日の問題

少子化・高齢化、人口減少に対応するために、労働力として余力があるとされる女性と高年齢者の就業率を上げる試みが実施されている。表1はその試みの一つの例であるが、2006年の高年齢者雇用安定法は2013年度を目標に65歳までの雇用の確保（形態は問わない）を事業主に義務づけた。2013年からは61歳定年制が実施される。定年年齢は目標年度（2025年）に65歳に引き上げられる。

表1 仕事と生活の調和推進のための行動指針（数値目標）

数値目標				
I 就労による経済的自立が可能な仕事			目標値	
①就業率		現状 (%)	5年後 (2012) (%)	10年後(2017) (%)
年齢群	20～34歳男性	90.3	93～94	93～94
	25～44歳女性	64.9	67～70	69～72
	60～64歳男女計	52.6	56～57	60～61
	65～69歳男女計	34.6	37	38～39
III 多様な働き方・生き方が選択できる社会			目標値	
⑪第一子出産前後の女性の継続就業率		38.0	45	55
⑬男女の育児休業取得率		女性 72.3	80	80
		男性 0.50	5	10
⑭6歳未満の子どもをもつ男性の育児・家事関連時間		1日当たり 60分	1時間 45分	2時間 30分

平成22年版子育て・子ども白書（ワーク・ライフバランス官民トップ会議決定 2007.12.8）から作成

I、III、①⑪⑬⑭は数値目標の中に掲げられた項目の番号を示す。

女性の就業率の上昇や仕事に関する意識に影響する要因として、性別役割分担や性別職務分離（基幹労働力・能力・成果主義と補助的労働力）などがある。女性を取り巻く就業環境はこれらだけに留まらず、不安定な派遣労働者や嘱託、パート・アルバイトの

多くが女性であり、高齢化・少子化による介護や子育ての負担とともに、女性の就業環境に影響している。出生率の低下は将来の労働力不足に帰結するが、女性の就業形態は多様であり、労働力率の上昇はみかけのみで実質を示しているとはいえない面がある。目標値としては正規社員、契約社員、派遣社員、時間労働などの就業形態を区分して設定する必要があるだろう。

4 人口減少、少子化・高齢化の進行

表2は高齢化の将来推計（社会保障・人口問題研究所2012年）を示している。これよれば、人口減少傾向はその後も継続し、高齢化率も上昇し続けるが、中位仮定では2020（平成18）年推計時よりも合計特殊出生率を高く設定しており、高齢化率は40%を超えない推計結果を示している。

表2 高齢化の将来推計（2012年推計）

出生率仮定 [長期の合計特殊出生率]		中位仮定 [1.35]	高位仮定 [1.60]	低位仮定 [1.12]	平成18年12月推計 中位仮定 [1.26]
死亡率仮定 [長期の平均寿命]		死亡中位仮定 [男=84.19年] [女=90.93年]			男=83.67年 女=90.34年
総人口	平成22（2010）年	12,806万人	12,806万人	12,806万人	12,718万人
	平成42（2030）年	11,662万人	11,924万人	11,417万人	11,522万人
	平成67（2055）年	9,193万人	9,880万人	8,593万人	8,993万人
	平成72（2060）年	8,674万人	9,460万人	7,997万人	
年少人口	平成22（2010）年	1,684万人 13.10%	1,684万人 13.10%	1,684万人 13.10%	1,648万人 13.00%
	平成42（2030）年	1,204万人 10.30%	1,432万人 12.00%	999万人 8.70%	1,115万人 9.70%
	平成67（2055）年	861万人 9.40%	1,140万人 11.5%	638万人 7.40%	752万人 8.40%
	平成72（2060）年	791万人 9.10%	1,087万人 11.5%	562万人 7.00%	

生産年齢人口	平成 22 (2010) 年	8,173 万人 63.80%	8,173 万人 63.80%	8,173 万人 63.80%	8,128 万人 63.90%
	平成 42 (2030) 年	6,773 万人 58.10%	6,807 万人 57.10%	6,733 万人 59.00%	6,740 万人 58.50%
	平成 67 (2055) 年	4,706 万人 51.2%	5,114 万人 51.8%	4,330 万人 50.40%	4,595 万人 51.10%
	平成 72 (2060) 年	4,418 万人 50.90%	4,909 万人 51.9%	3,971 万人 49.70%	
65歳以上人口	平成 22 (2010) 年	2,948 万人 23.00%	2,948 万人 23.00%	2,948 万人 23.00%	2,941 万人 23.10%
	平成 42 (2030) 年	3,685 万人 31.6%	3,685 万人 30.90%	3,685 万人 32.30%	3,667 万人 31.8%
	平成 67 (2055) 年	3,626 万人 39.40%	3,626 万人 36.70%	3,626 万人 42.20%	3,646 万人 40.50%
	平成 72 (2060) 年	3,464 万人 39.90%	3,464 万人 36.60%	3,464 万人 43.30%	

このような社会背景の下での生活意識の中核となる「全体的生活満足感」と、居住する環境の捉え方を示す「市の捉え方」について、属性による比較と両者の関連性を検討した。

I 調査の概要と基本属性

1 調査の手続き

調査対象：北九州市在住 20～79 歳 1,500 人

調査期間：2012 年 3 月 12 日～26 日

調査方法：調査票を用いた郵送法

回収総数：526 票

有効回収票：526 票

有効回収率：35.0%

調査票は第 2 章と共通である。第 2 章の最後に資料として掲載している。

2 対象者の基本属性

調査対象者の基本属性は表3の通りである。

表3 調査対象者の基本属性

属性		度数	構成比
全体		526	100.0
性別	男性	225	42.8
	女性	287	54.6
	無回答	14	2.7
年齢5歳区分	20～24歳	20	3.8
	25～29歳	33	6.3
	30～34歳	29	5.5
	35～39歳	42	8.0
	40～44歳	30	5.7
	45～49歳	39	7.4
	50～54歳	50	9.5
	55～59歳	45	8.6
	60～64歳	79	15.0
	65～69歳	58	11.0
	70～74歳	56	10.6
	75歳以上	40	7.6
	無回答	5	1.0
年齢3区分	20～39歳	124	23.8
	40～64歳	243	46.6
	65歳以上	154	29.6
世帯構成	ひとり暮らし	65	12.4
	夫婦のみ	174	33.1
	親世代との二世帯家族	78	14.8
	子世代との二世帯家族	123	23.4
	親・子・孫・その他の親族の三世帯家族	35	6.7
	その他	42	8.0
	不明	9	1.7
配偶関係	未婚	91	17.3
	既婚	363	69.0
	離別	65	12.4
	無回答	7	1.3

住居	一戸建て（借家）	39	7.4
	一戸建て（持ち家）	274	52.1
	アパート、マンションなどの集合住宅（持ち家）	71	13.5
	アパート、マンションなどの集合住宅（借家）	82	15.6
	公営の借家（公団住宅、市営住宅など）	45	8.6
	勤め先の寮や職員住宅	7	1.3
	その他	3	0.6
	不明	5	1.0
居住年数	1年未満	6	1.1
	1～4年	28	5.3
	5～9年	26	4.9
	10年以上	295	56.1
	生まれてからずっと	164	31.2
	不明	7	1.3
職種	販売従事者（小売店主、デパート・専門店・スーパー等、営業など）	44	8.4
	事務系従事者（一般事務、外勤事務）	54	10.3
	技術・技能系従事者（製造、加工、組立、建設、電気工など）	45	8.6
	通信系技術者（パソコンネットワーク設定、プログラミング・情報処理など）	3	0.6
	サービス系従事者（美容師、調理師、ホテル業、飲食店など）	33	6.3
	運輸・配送従事者（配送運転手・助手、荷役などの作業など）	9	1.7
	福祉系従事者（社会福祉協議会、福祉施設、介護支援専門員、介護職など）	17	3.2
	公務員	18	3.4
	事務系専門職（医療事務、オペレーターなど）	7	1.3
	医療系専門職（医師、薬剤師、保健師、看護師など）	22	4.2
	その他の専門職（弁護士、教員、社会福祉士、介護福祉師等福祉系専門職など）	21	4.0
	無職	104	19.8
	家事専業（無職の）	95	18.1
	その他	48	9.1
不明	6	1.1	

就業形態	自営・会社経営	44	8.4
	家族従業者	11	2.1
	正社員・正規職員	138	26.2
	派遣社員・契約社員	17	3.2
	パート・アルバイトなど	76	14.4
	嘱託など	19	3.6
	臨時・日雇いなど	4	0.8
	内職	3	0.6
	その他	8	1.5
	仕事をしていない	174	33.1
	不明	32	6.1
現在の立場	学生（高校、予備校、専門学校、短大、大学、大学院など）	5	1.0
	学校卒業後に就職、習い事、家事手伝いをしている 40 歳未満の独身	25	4.8
	40 歳以上 60 歳未満の独身	16	3.0
	60 歳以上の独身（配偶者との離別・死別を含む）	19	3.6
	子どものいない夫婦	29	5.5
	第一子が小学入学前の親	15	2.9
	第一子が小学・中学生の親	22	4.2
	第一子が高校・大学・大学院生の親	20	3.8
	就職や結婚をした子どもが一人以上いる親	63	12.0
	すべての子どもが就職や結婚をした親	74	14.1
	その他	8	1.5
	不明	230	43.7

性別では、女性が多く、年齢構成では 60 歳代が多いが、ライフステージで区分した年齢 3 区分では 40～64 歳が最も多い。これは 60～64 歳の回答者数が最も多かったことを反映している。

世帯構成では「夫婦のみ家族」が 3 割以上を占めて、最も多く、続いて「子どもとの同居の二世帯家族」が多い。これは回答者の年齢が比較的高いことを反映している。

配偶関係では「既婚」が 7 割である。住宅の形態では「一戸建て持ち家」が 5 割以上で最も多く、集合住宅の持ち家を合わせると、持ち家率は約 65%になる。

居住年数は「10 年以上」が 5 割を超え、「生まれてからずっと」の地着き者を含めると、長期居住者が 9 割近くを占めている。

就業形態は「仕事をしていない」人が 3 割以上であり、回答者の年齢の高さを示している。「正社員・正規職員」は 26.2%で二番目に多いが回答者の 4 分の 1 に止まっている。三

番目には「パート・アルバイトなど」が多く、14.4%である。

現在の立場で最も多いのは回答を保留した「不明」であり、4割以上を占める。回答しにくい、分かりにくい質問だったのかは不明である。その他では「すべての子どもが就職や結婚をした親」14.1%、「就職や結婚をした子どもが一人以上いる親」12.0%が多かった。

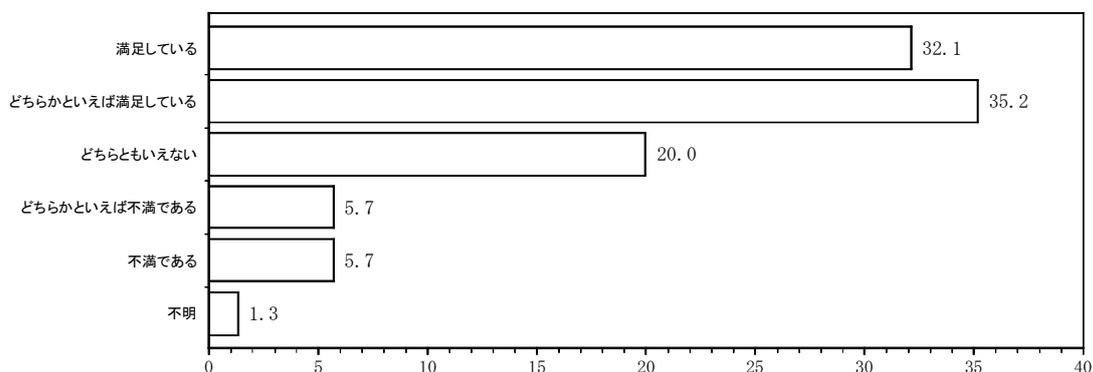
Ⅱ 調査結果

1 全体的生活満足感

全体的生活満足度の結果は図1に示す通りである。

図からは「満足している」「どちらかといえば満足している」の両方で6割を超える。「不満である」「どちらかといえば不満である」の両者では1割程度（60人）ある。以下の図中の数値は少数第2位を四捨五入した構成比を示す。

図1 全体的生活満足感



2 居住継続意向

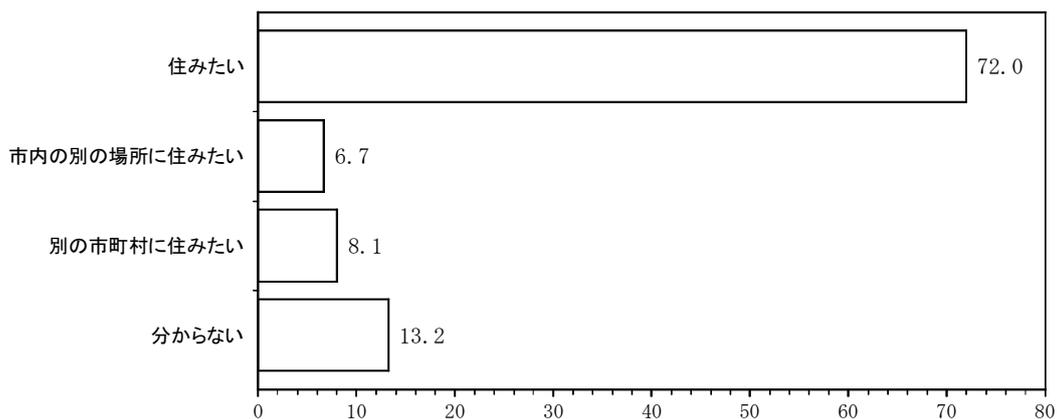
(1) 今の場所に住み続ける

図2は今の場所に住み続けたいと思っているかを質問した結果を示している。これによると「住みたい」人が7割以上である。

居住年数が「10年以上」の人が5割を超え、「生まれてからずっと」の地着き者を含めると、長期居住者が9割近くを占めており、生活全体の満足感も「満足している」「どちらかといえば満足している」の両方で6割を超えていることから、現在居住している場所を転居したいと考えている人が少ないのは首肯できる結果である。

転居にしても「市内の別の場所」への転居を考えている人も約7%であり、市内に住み続けたいと考えている人は8割近くになる。「別の市町村に転居したい」人は1割に満たない。

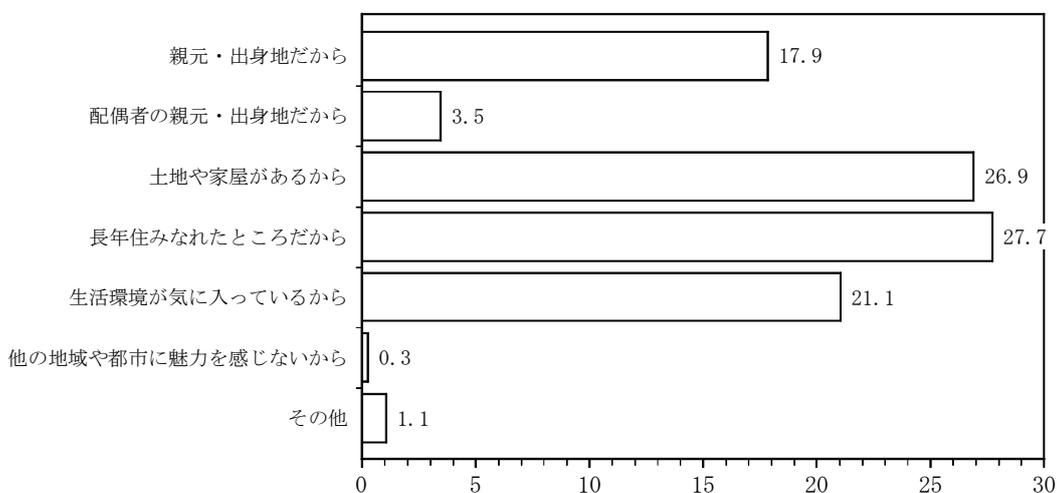
図2 今の場所に住み続ける



(2) 住み続ける理由 (対象者: 375)

今の場所に住み続ける理由は、「長年住みなれたところだから」「土地や家屋があるから」が同水準で多く、次いで「生活環境が気に入っているから」「親元・出身地だから」が理由となっており、「他の地域や都市に魅力を感じない」を理由とした人はほとんどいない。

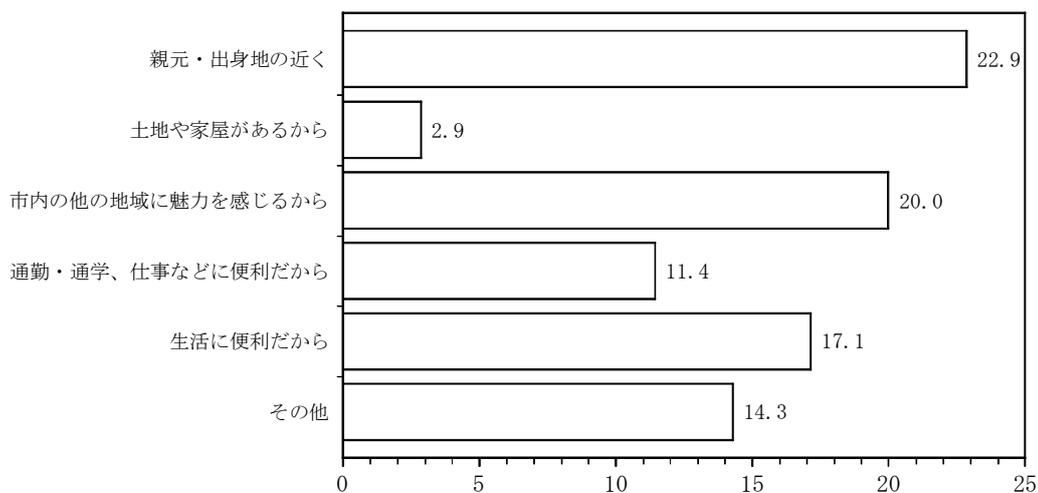
図3 今の場所に住み続ける理由



(3) 転居したい市内の別の場所 (対象者：35)

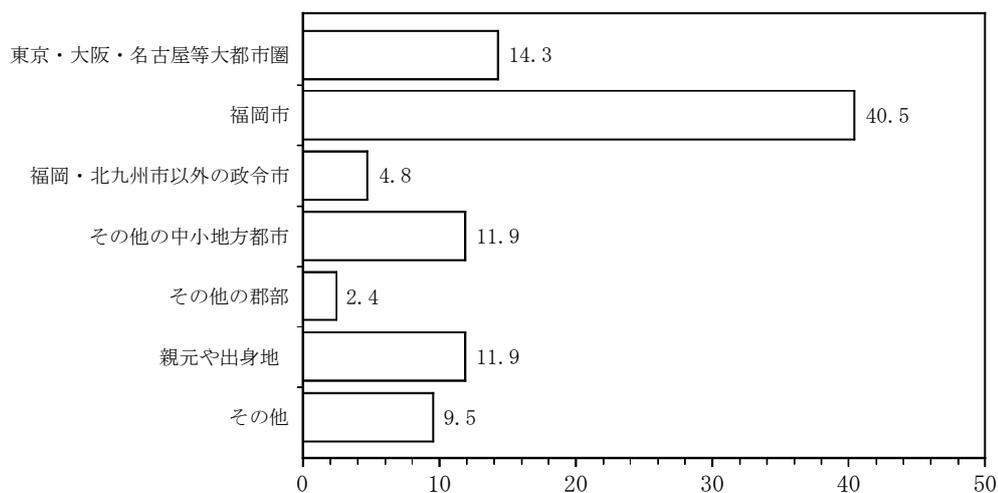
市内の別の場所に転居した人の転居先は「親元・出身地の近く」が第一で、「市内の他の地域に魅力を感じるから」が続いて多い。「生活に便利だから」が三番目であり、回答者の年齢層が高いことを反映して、通勤・通学の便利さよりも生活の便利さを優先する人が多い。

図4 転居したい市内の別の場所



(4) 転居したい市外の別の場所 (対象者：42)

図5 転居したい市外の市町村



転居したい市外の別の場所は図5の通り、「福岡市」である。

福岡市以外の場所では「東京・大阪・名古屋などの大都市圏」と「その他の中小都市」「親元の出身地」が同水準であり、「福岡市・北九州市以外の政令市」「その他の郡部」に魅力を感じている人は少ないようである。

3 他都市と比較した居住している環境の捉え方（市の捉え方）

居住する環境の捉え方として、他都市と比較して居住している市をどのように思うかを質問した。この結果を以下では「市の捉え方」とした。結果は表4である。

表4の①～⑳から分かる通り、質問に示した捉え方は肯定的と考えられる内容であり、それに対して「そう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「ややそう思わない」「そう思わない」の5段階から一つ選択する方法で回答を求めた。

「そう思う」と回答した人が多いのは⑯食べ物がおいしい、⑱医療施設が整っている、④交通機関が便利の3項目であり、その中でも⑯食べ物がおいしいは4割近くの人が肯定している。

「ややそう思う」というやや肯定した捉え方をしているのは、⑯食べ物がおいしいを4割以上の人が選択し、⑱医療施設が整っている、⑩人情味がある、⑳多様な飲食店がある、⑦きれいな街や公園など心が休まる場がある、④交通機関が便利、⑭買物をする際、多様な商品があり、楽しめる、⑮多様な情報が容易に手に入る、の8項目である。10番目に多かったのは⑱芸術・文化施設が多いであり、2割台の回答であった。

「ややそう思わない」とやや否定した捉え方は、①若者が多く活気がある、⑥娯楽が多い、⑧したいと思う仕事がある、⑤国際都市である、⑨教養を高め文化に接する機会が多い、が上位であり、高齢化が進み、したい仕事がなく、娯楽や教養文化面にも期待できないと捉えていることを示唆している。

「そう思わない」と否定した捉え方の上位は、①若者が多く活気がある、⑧したいと思う仕事がある、⑤国際都市である、⑨教養を高め文化に接する機会が多い、⑰異性と知り合う機会が多いであり、「ややそう思わない」と多くが共通している。否定的回答の多い項目は一方で「どちらともいえない」と判断に迷う回答が多い項目でもある。

判断に迷う回答が少ない項目は「そう思う」と肯定的回答の多い項目でもあり、これら確信的に肯定した捉え方や、やや肯定した捉え方が多い項目を除くと、21項目中12項目が判断に迷う回答が最も多い項目であった。

全体的には仕事面、教養文化面、異性と知り合う機会、活気などに欠けるという捉え方のようである。

表4 他都市と比較した居住している市の捉え方

	思う	やや思 う	ちらとも いえない	やや思わ ない	思わな い
①若者が多く活気がある	2.7	12.9	35.0	①26.6	①21.1
②古いしきたりが無い	11.6	26.4	⑤40.5	15.0	5.1
③北九州市に住んでいることを自慢できる	16.2	26.2	38.4	9.7	8.6
④交通機関が便利	③26.2	⑥35.7	18.3	10.8	7.2
⑤国際都市である	5.7	18.1	39.7	④19.0	③15.6
⑥娯楽が多い	9.5	25.9	34.4	②19.8	8.2
⑦きれいな街や公園など心が休まる場がある	11.6	⑤36.5	30.2	14.8	4.9
⑧したいと思う仕事がある	8.2	15.8	36.7	③19.2	②16.9
⑨教養を高め文化に接する機会が多い	5.1	18.6	⑤40.5	⑤18.6	④14.4
⑩人情味がある	13.3	③38.0	35.6	6.5	4.9
⑪子どもの教育環境がよい	7.0	⑨27.4	③44.5	12.2	7.0
⑫人と知り合う機会、活動の場が多い	6.7	22.4	48.5	15.4	5.3
⑬きれいな男女が多い	3.8	14.4	②51.7	16.3	11.6
⑭買物をする際、多様な商品があり、楽しめる	13.3	⑦35.4	28.5	13.5	8.0
⑮多様な情報が容易に手に入る	8.7	⑧31.9	39.7	12.9	4.9
⑯食べ物がおいしい	①39.0	①41.3	13.7	3.0	1.5
⑰異性と知り合う機会が多い	2.5	6.8	①58.4	16.3	⑤13.3
⑱芸術・文化施設が多い	8.9	⑩27.2	39.5	13.7	8.7
⑲行政機関がよくやっている	6.3	22.1	④43.9	16.3	10.1
⑳多様な飲食店がある	15.6	③38.0	31.6	8.9	4.4
21 医療施設が整っている	②26.8	②39.4	23.6	5.5	4.0

数値は少数第2位を四捨五入した構成比を示す。

構成比の前の○囲み数値は回答の多い順位を示す。

この結果を「そう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「ややそう思わない」「そう思わない」に順に5、4、3、2、1と配点して得点化し、記述統計量を算出した結果が表5である。

平均値が3に近く、標準偏差が小さいほど多くの方が判断にまよう項目を示している。また、平均値が3よりも高く標準偏差が小さいほど多くの方が肯定している項目を示し、平均値が3よりも小さく標準偏差が小さいほど多くの方が否定している項目を示している。

⑯食べ物がおいしい、⑰医療施設が整っている、④交通機関が便利、⑳多様な飲食店があるなどは平均値が高く、標準偏差も小さい。⑰異性と知り合う機会が多い、⑬きれいな男女が多いは平均値が低く、標準偏差も小さい。①若者が多く活気がある、⑧したいと思

う仕事があるは平均値が低いが標準偏差は小さいとはいえ、回答にばらつきがあることを示唆している。

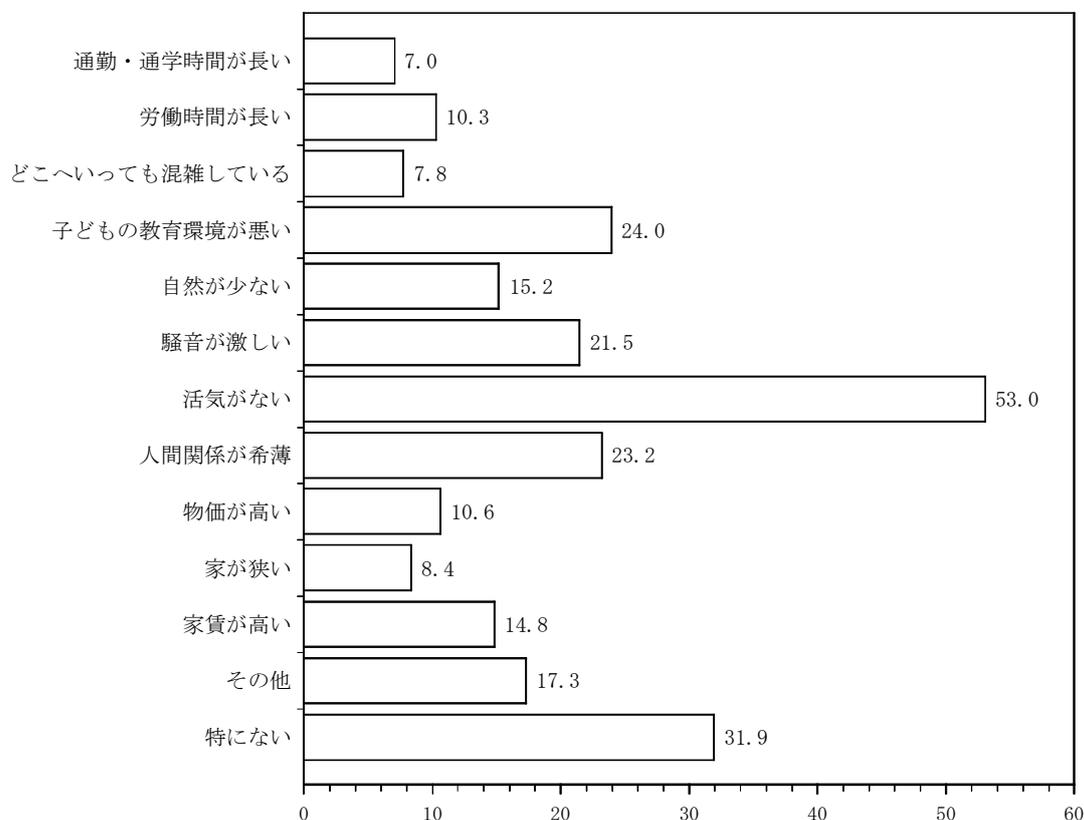
表5 他都市と比較した居住している市の捉え方の記述統計量

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
①若者が多く活気がある	517	1	5	2.485	1.052
②古いしきたりがない	519	1	5	3.247	1.020
③北九州市に住んでいることを自慢できる	521	1	5	3.321	1.123
④交通機関が便利	517	1	5	3.640	1.195
⑤国際都市である	516	1	5	2.789	1.097
⑥娯楽が多い	514	1	5	3.089	1.089
⑦きれいな街や公園など心が休まる場がある	516	1	5	3.357	1.036
⑧したいと思う仕事がある	509	1	5	2.784	1.164
⑨教養を高め文化に接する機会が多い	512	1	5	2.809	1.074
⑩人情味がある	517	1	5	3.491	0.978
⑪子どもの教育環境がよい	516	1	5	3.155	0.977
⑫人と知り合う機会、活動の場が多い	517	1	5	3.099	0.930
⑬きれいな男女が多い	515	1	5	2.821	0.956
⑭買物をする際、多様な商品があり、楽しめる	519	1	5	3.329	1.119
⑮多様な情報が容易に手に入る	517	1	5	3.271	0.971
⑯食べ物がおいしい	518	1	5	4.149	0.881
⑰異性と知り合う機会が多い	512	1	5	2.680	0.886
⑱芸術・文化施設が多い	516	1	5	3.141	1.058
⑲行政機関がよくやっている	519	1	5	2.981	1.026
⑳多様な飲食店がある	518	1	5	3.523	1.008
㉑医療施設が整っている	522	1	5	3.801	1.027

4 住みにくい点

居住している市の住みにくいと感じている点は圧倒的に「活気がない」である。その半分の水準で「子どもの教育環境が悪い」「人間関係が希薄」「騒音が激しい」が続いて多い。「特にない」は二番目に多いが、この両者の中間である。

図6 住みにくいと思う点



以上、全体的生活満足感、住んでいる場所からの転居意向、居住している市の捉え方、住みにくいと感じている点について結果を見た。

これによると、社会的背景として、不況が続き、賃金の低下や就業条件の変化があるにもかかわらず、全体的生活満足感は低いといえず、1970年代の全体的生活満足感調査の結果よりも満足度は高いという結果である。居住している場所での居住継続意向も高く、住みにくい点も教育環境、人間関係、騒音などに多少の住みにくさを感じている人は存在するが、活気のなさを除くと大きな生活の問題はないと感じている人は多い。活気のなさは高齢化の進行によるのではなく、量販店の郊外への進出による生活の郊外化が進み、中心市街地や商店街の衰退から感じていることであろう。市の捉え方も同様に活気がない(若者が少ない)であるが、食べ物がおいしい、医療施設が整っている、交通機関が便利、多様な飲食店がある反面、仕事面ではしたいと思う仕事がない、教養文化面での接する機会が少

ない、異性と知り合う機会が少ないという捉え方のようなものである。全体的な生活満足度は高いが、仕事、教養文化、異性と知り合う機会は不十分であり、近隣の政令市で補うことになるということかもしれない。

Ⅲ 属性による比較

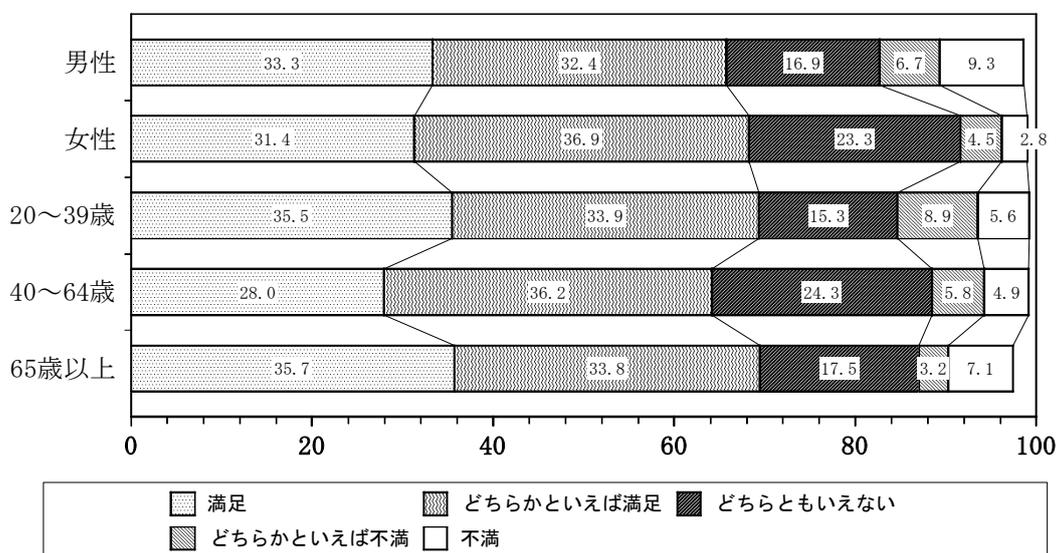
ここでは、性別、年齢区分別などにより全体的な生活満足感と市の捉え方を比較し、属性による違いを見る（無回答は除く）。

1 全体的生活満足感の属性による比較

(1) 性別・年齢3区分別

図7は性別・年齢3区分別（以下、年齢区分別）の全体的な生活満足感を示している。これによると、性別では男性に不満（「不満」「どちらかといえば不満」以下同様）が多く、女性に判断に迷う人が多い。年齢区分別では40～64歳に満足（「満足」「どちらかといえば満足」以下同様）が少なく判断に迷う人が多い傾向がある。

図7 性別・年齢3区分と生活満足感

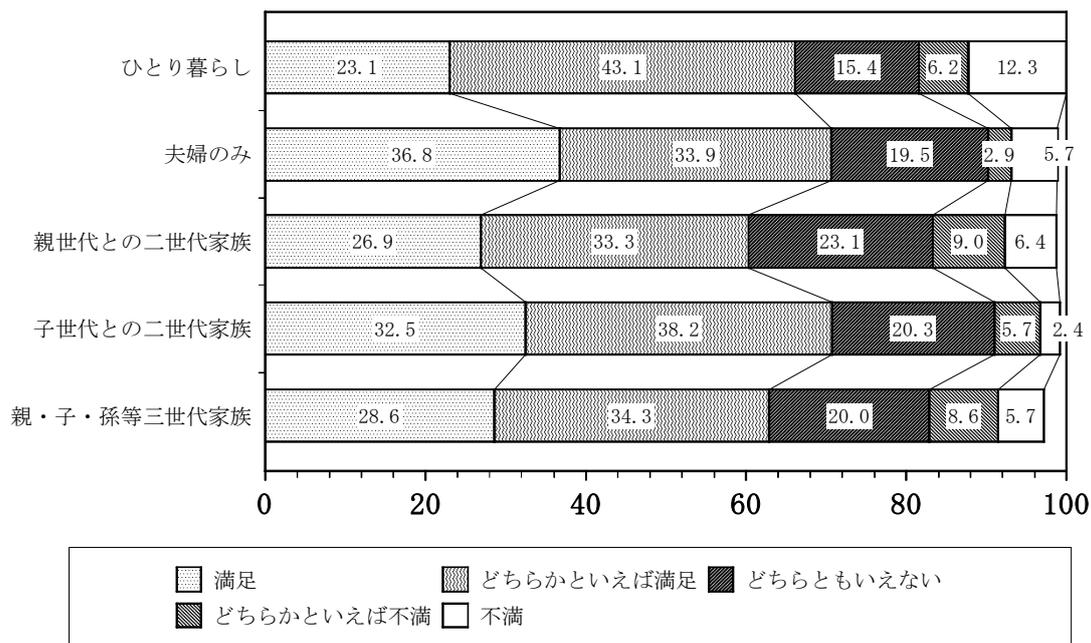


(2) 世帯構成

世帯構成では、満足が多いのは「夫婦のみ家族」「子世代との二世帯家族」であり、満足が低い傾向を示しているのは「ひとり暮らし」「親世代との二世帯家族」「親・子・孫の三

世代家族」である。この三者は不満と回答した人も多い傾向を示している。

図8 世帯構成と生活満足感



(3) 住宅形態

図9は住宅形態と全体的な生活満足感の関連を示している。これによると、「一戸建て借家」「公営（公団住宅、市営住宅など）の借家」で満足が少なく、「どちらともいえない」と判断を保留した人が多く、不満も他の住宅形態に比べて多いことが分かる。

同じ借家の「アパート、マンションなどの集合住宅（借家）」では、満足は「一戸建て持ち家」「アパート、マンションなど（持ち家）」と同水準であるが、不満は「一戸建て借家」「公営（公団住宅、市営住宅など）の借家」と同水準である。

「勤め先の寮や職員住宅」は特徴的で「どちらともいえない満足」が顕著に多く、不満がない。しかし、回答者数は7人と少数である。

図9 住宅と生活満足感

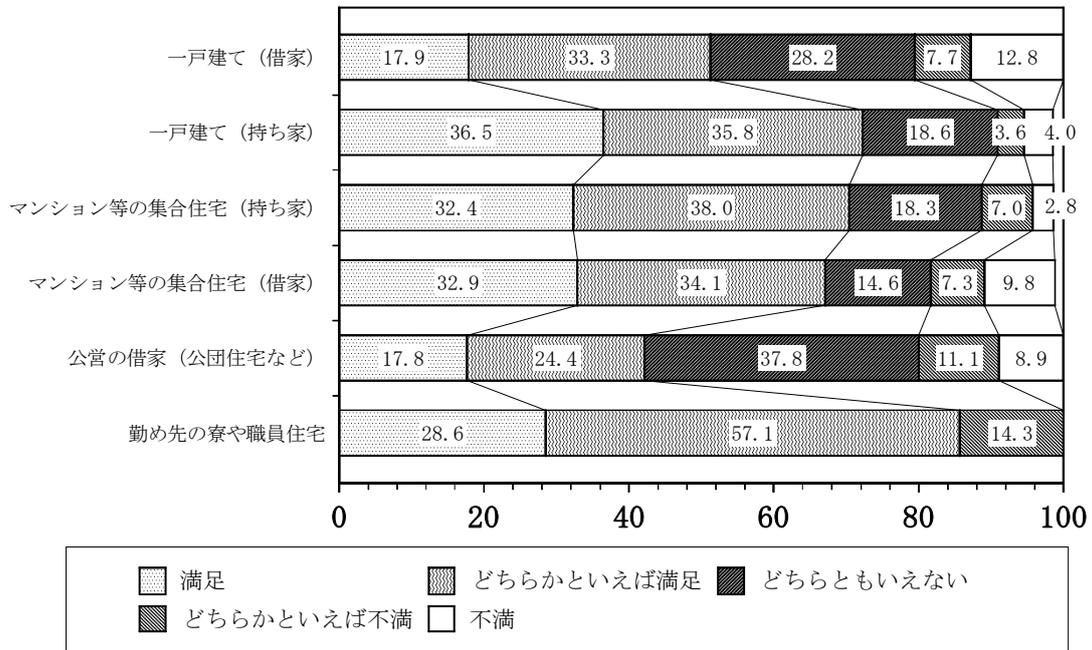
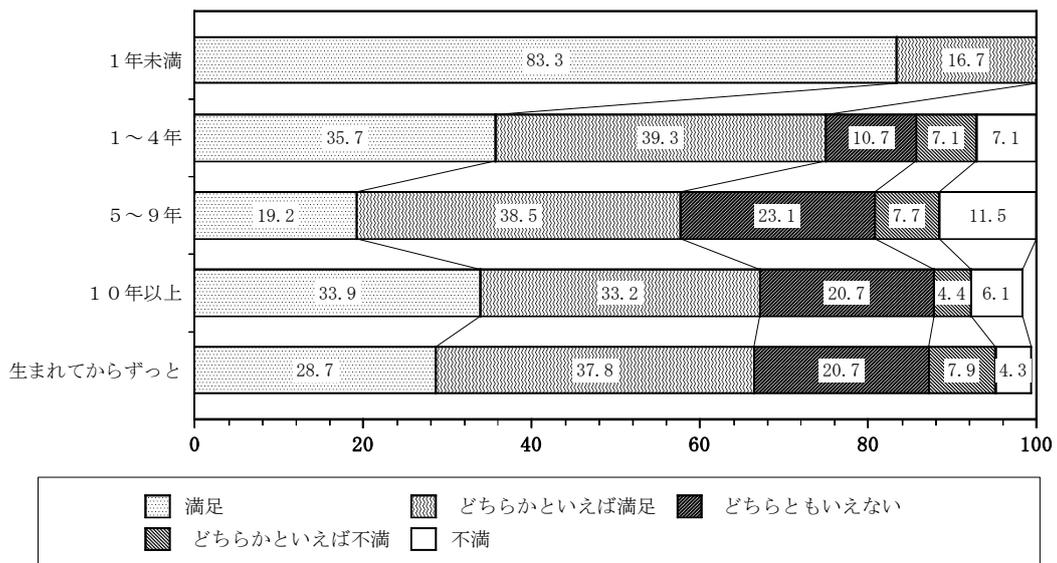


図10 居住年数と生活満足感



(4) 居住年数

図 10 は居住年数と全体的な生活満足感の関連を示している。居住年数「1年未満」は6人と少数である。このため満足が8割以上、残りは「どちらかといえば満足」であり、不満は存在しない。これを除くと、「居住年数5～9年」の満足が少なく、不満が多い。

居住年数1～4年は満足、不満が明確で「どちらともいえない」が少ない。

相対的には居住年数が長い方が満足が多いという結果である。

(5) 就業形態

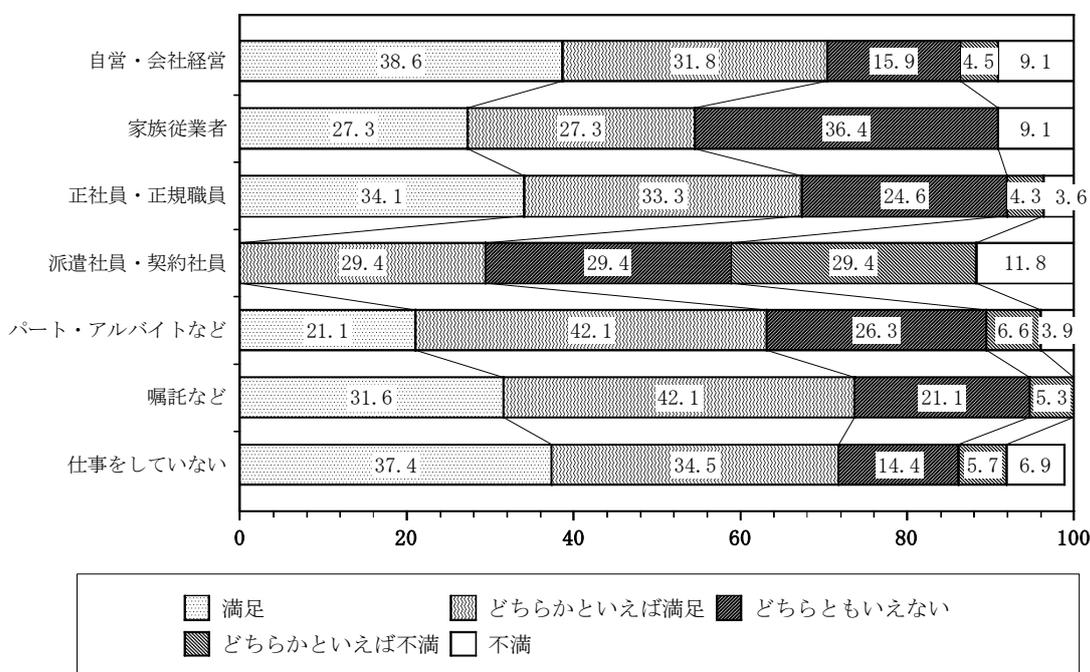
図 11 は就業形態と全体的な生活満足感の関連を示している。これによると、「派遣社員・契約社員」は該当者が17人と少ないのであるが、満足が顕著に少ない。

次いで満足が少ないのは「パート・アルバイトなど」であり、「どちらかといえば満足」が多くなっている。

「正社員・正規職員」と「嘱託など」「仕事をしていない」は満足が多く、同水準である。

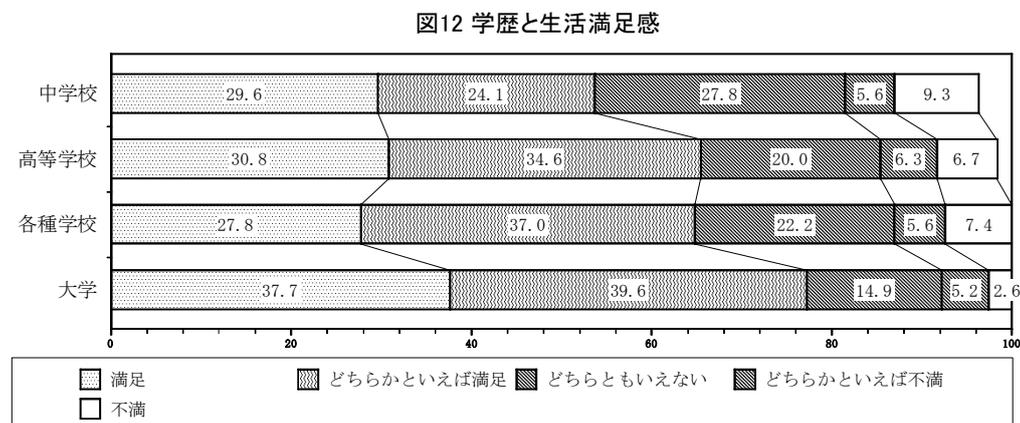
「家族従業者」は「どちらともいえない」と態度を保留した人が多い。

図11 就業形態と生活満足感



(6) 学歴

図 12 の通り、学歴が高いほど全体的生活満足感が高い傾向がある。



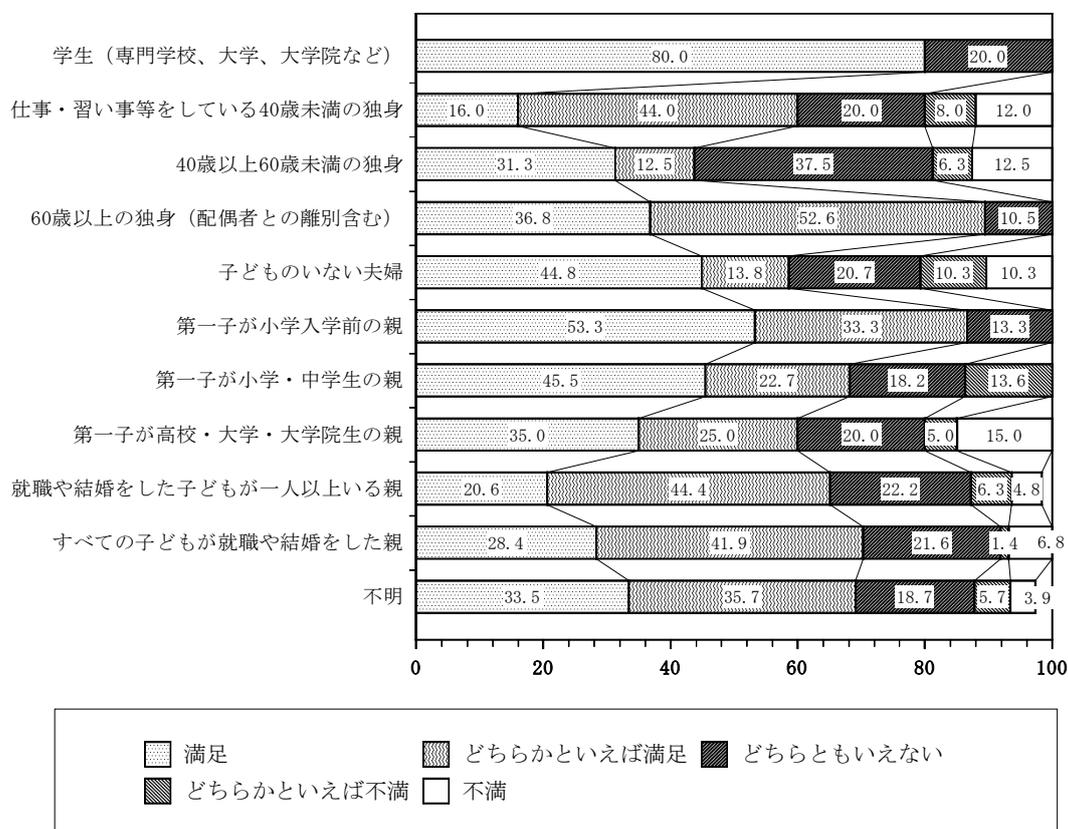
(7) 現在の立場

図 13 は現在の立場と全体的な生活満足感の関連を示している。図中の「不明」が 43.7% を占め、「就職や結婚をした子どもが一人以上いる親」「すべての子どもが就職や結婚をした親」が各 10%以上である以外は、該当者が回答者の 1~5%程度の少数である。このため、回答が顕著に片寄っている可能性がある。

結果は「第一子が小学入学前の親」の満足（「どちらかといえば満足」を除く）が顕著に高く、続いて「第一子が小学・中学生の親」「子どものいない夫婦」の満足が高い。「60 歳以上の独身（配偶者との離別・死別を含む）」「第一子が高校・大学・大学院生の親」「40 歳以上 60 歳未満の独身」の満足が同水準で続いて高く、「不明」もほぼ同じである。比較的該当者の多い「就職や結婚をした子どもが一人以上いる親」や「すべての子どもが就職や結婚をした親」と「学校卒業後に就職、習い事、家事手伝いをしている 40 歳未満の独身」は「第一子が小学入学前の親」「第一子が小学・中学生の親」「子どものいない夫婦」等に比べると満足が少ない。ただし、「どちらかといえば満足」では「不明」も含めて高い水準を示している。満足とはいいいきれないが、「どちらかといえば満足」であるという感じかたが多いようである。

この属性は「不明」が多いことから、回答が面倒な質問であった可能性が高い。あるいは選択肢として示した内容に該当しない回答者が多く存在したとも考えられる。ここで図示することを省略すべきであったかも知れないし、このような質問には今後、留意が必要であろう。

図13 現在の立場と生活満足感



（8）生活しにくい点

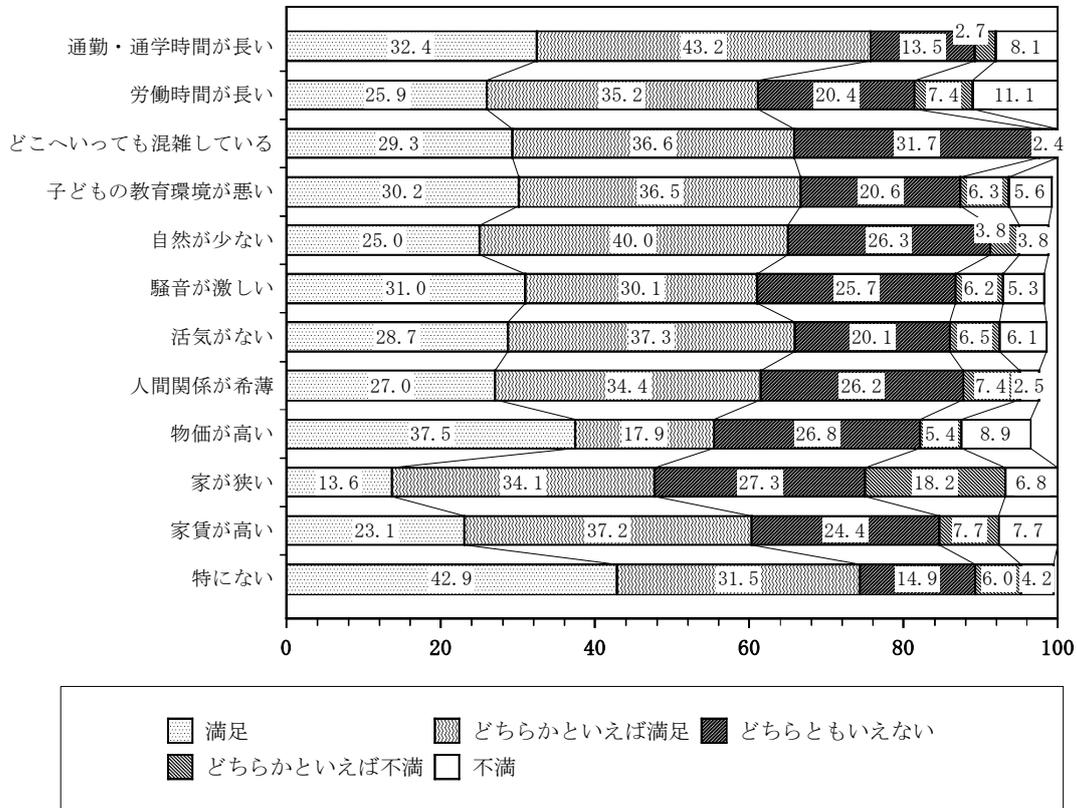
図14は生活しにくい点と全体的な生活満足感の関連を示している。これによると生活しにくい点が「特にない」と「通勤・通学時間が長い」は満足（「満足」「どちらかといえば満足」を含む）が多い。

この他では大差がないが、「労働時間が長い」は不満が多い。また「物価が高い」は「どちらかといえば満足」が少なく「満足」が多い等の多少の違いがある。

「家が狭い」「家賃が高い」は満足が少なく、特に前者では「不満」が多い。

このように「家が狭い」「労働時間が長い」「家賃が高い」など、生活の場や生活を支える基本的側面に生活しにくさを感じている人の満足感が低いことを示唆している。

図14 生活しにくい点と生活満足感



2 市の捉え方の性別・年齢3区分別比較

市の捉え方の属性別比較は、市の捉え方が21項目と多いこともあり、性別と年齢3区分別比較に止めた。

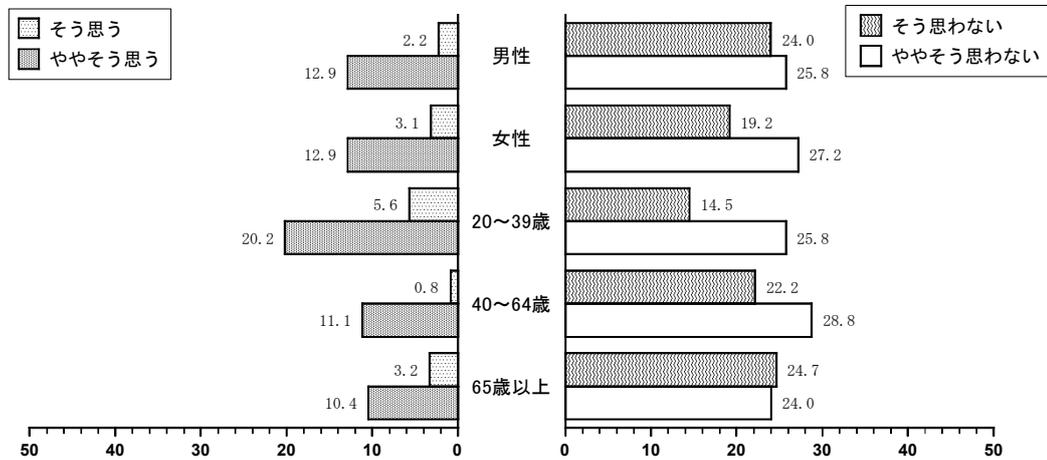
(1) 若者が多く活気がある

図15は性別と年齢3区分別の市捉え方との関連を示している。図は左側に肯定的回答の構成比、右側に否定的回答の構成比を示し、「どちらともいえない」と態度を保留した回答や「不明」は省略している。

性別では男性と女性間に大きな差は認められない。

年齢3区分別では20～30歳代の「そう思う」「ややそう思う」が他の年代に比べて多く、「そう思わない」が少ないなど、当事者(若者)自身は若者が少ない、活気がないと、他の年代ほど感じていないことを示している。

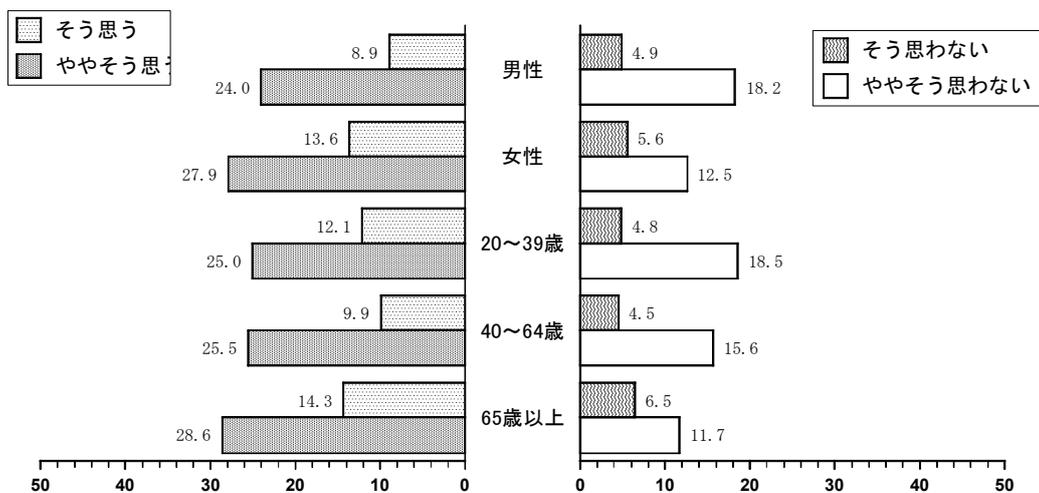
図15 性別・年齢3区分別①若者が多く活気がある



(2) 古いしきたりがない

図 16 の通り、性別では女性、年齢3区分別では 65 歳以上に若干の違いが認められる。年齢が高いほど 65 歳以上が否定的回答が少ないのは、年齢が低い人ほどに「しきたり」を意識しないことを示唆している。一方、女性は男性よりも「古いしきたりがない」ことに肯定的であった。

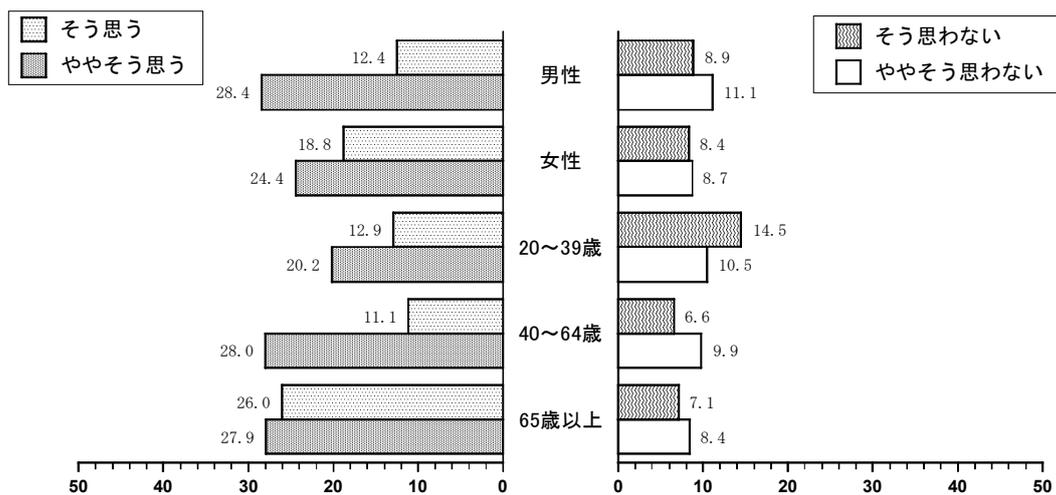
図16 性別・年齢3区分別②古いしきたりがない



(3) 北九州市に住んでいることを自慢できる

図 17 によると、性別では女性の方が住んでいる市を自慢できている人が多い。年齢3区分では年齢が高い方が自慢できている人が多くなる傾向を示している。

図17 性別・年齢3区分別③北九州市に住んでいることを自慢できる



(4) 交通機関が便利

図18 性別・年齢3区分別④交通機関が便利

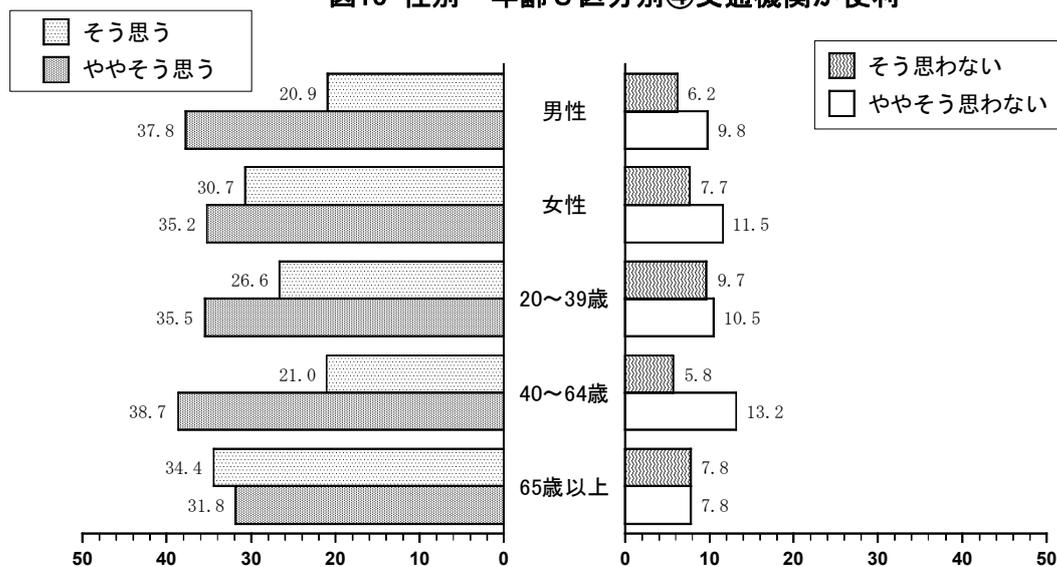
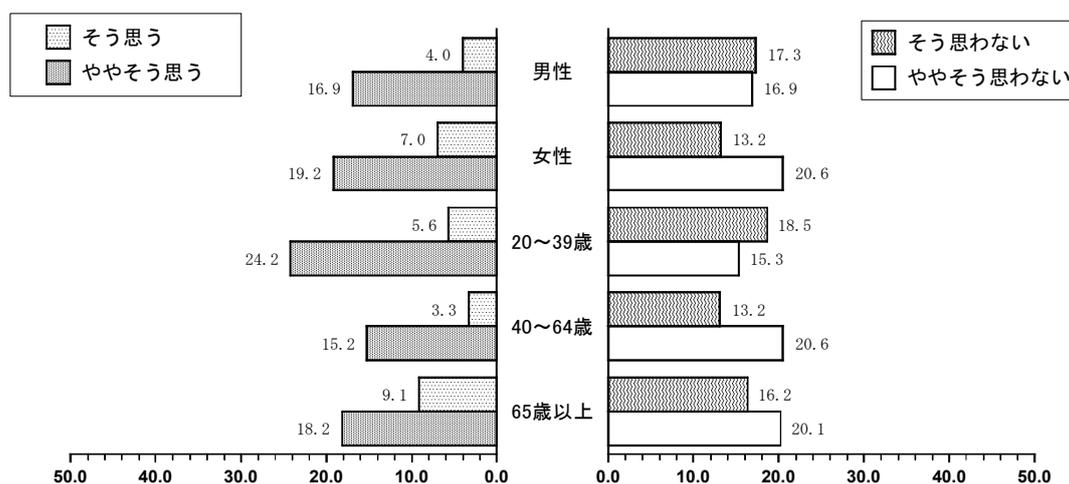


図 18 は交通機関の便利さである。否定的回答が少ない点では、市に住んでいることを自慢できるとほとんど同じ傾向を示している。性別では女性の方が便利と思っている。年齢 3 区分では 40～64 歳の方が「そう思う」と肯定した人が少ないという結果である。

(5) 国際都市である

「国際都市である」に関しては全体的に肯定・否定ともに低水準で、判断に迷う項目である。性別や年齢 3 区分別で見ても否定的回答が多い。

図19 性別・年齢3区分別⑤国際都市である

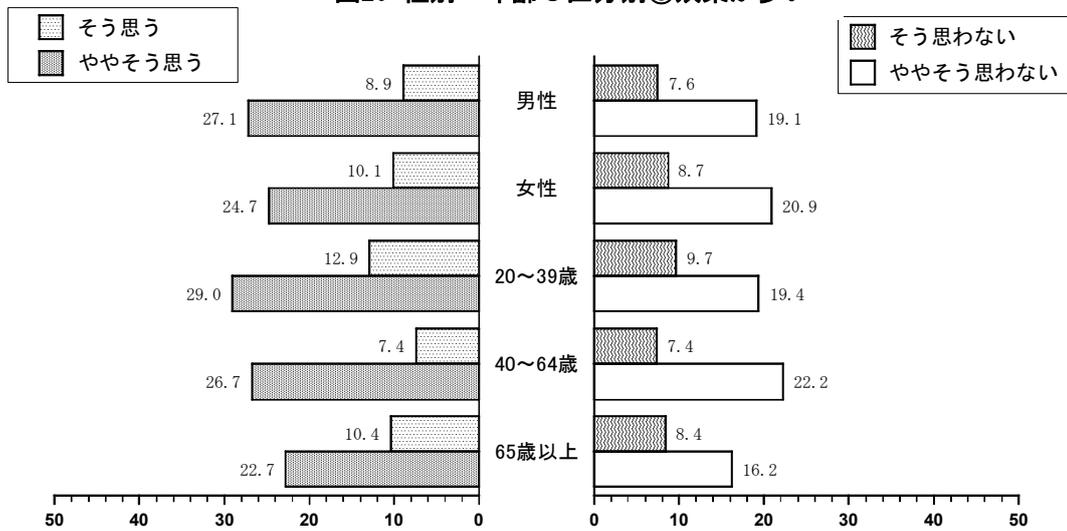


(6) 娯楽が多い

この項目も肯定・否定の両方の回答は多くなく殆ど同じ水準である。このことから判断に迷う項目であることが分かる。

また、属性間でも大差がない。

図20 性別・年齢3区分別⑥娯楽が多い

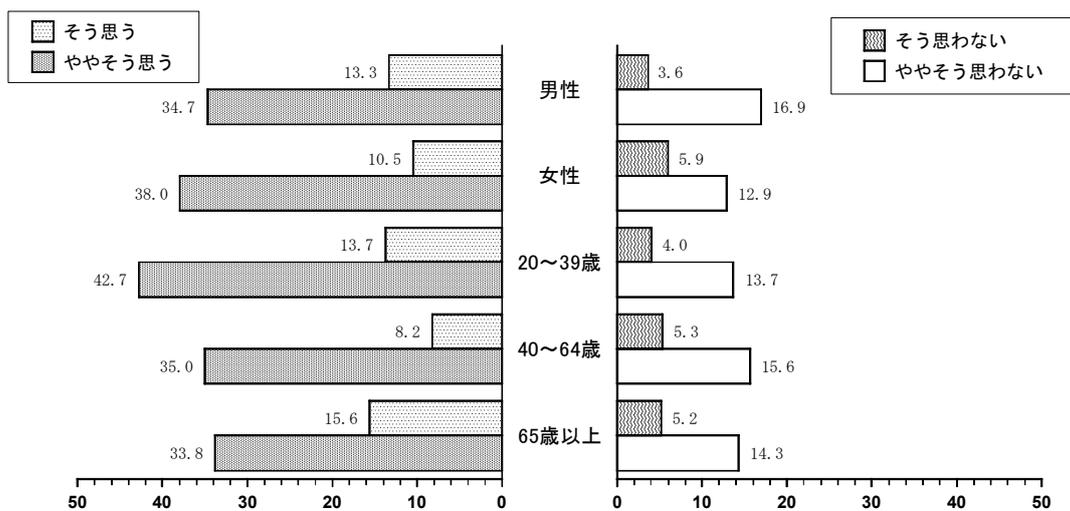


(7) きれいな街や公園など心が休まる場がある

全体的に肯定的回答が否定的回答を上回っている。

属性別では顕著な違いは認められない。

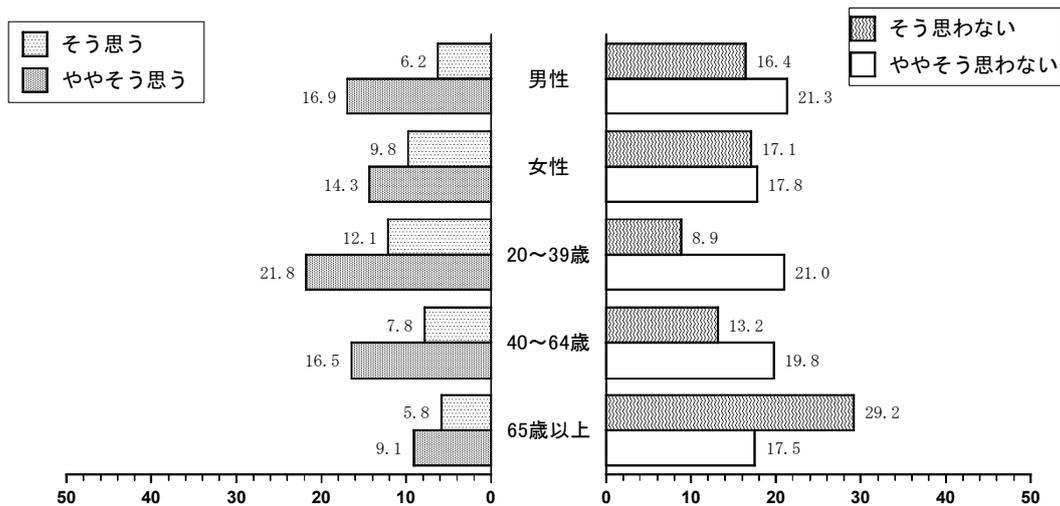
図21 性別・年齢3区分別⑦きれいな街や公園など心が休まる場がある



(8) したいと思う仕事がある

否定的回答が肯定する回答を上回っている。年齢が高いほど否定的な傾向が認められる。

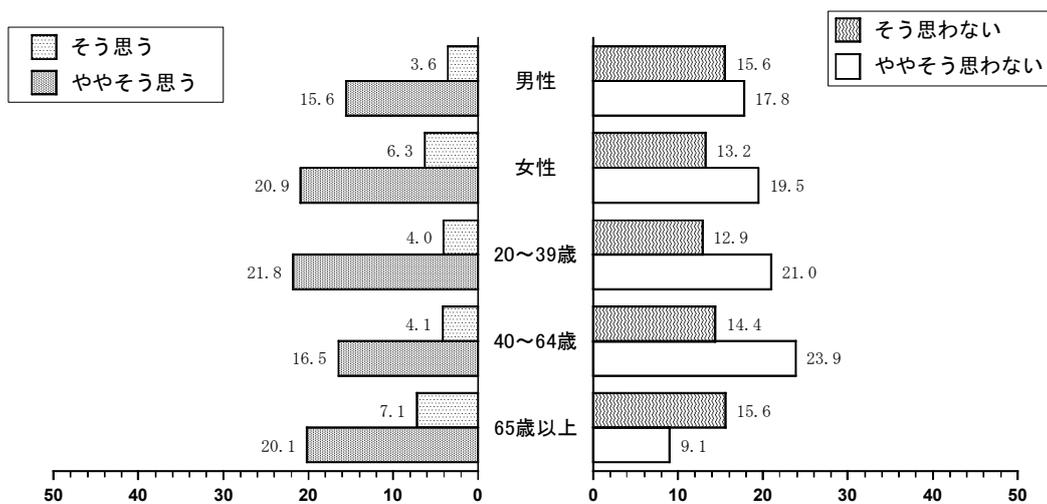
図22 性別・年齢3区分別⑧したいと思う仕事がある



(9) 教養を高め文化に接する機会が多い

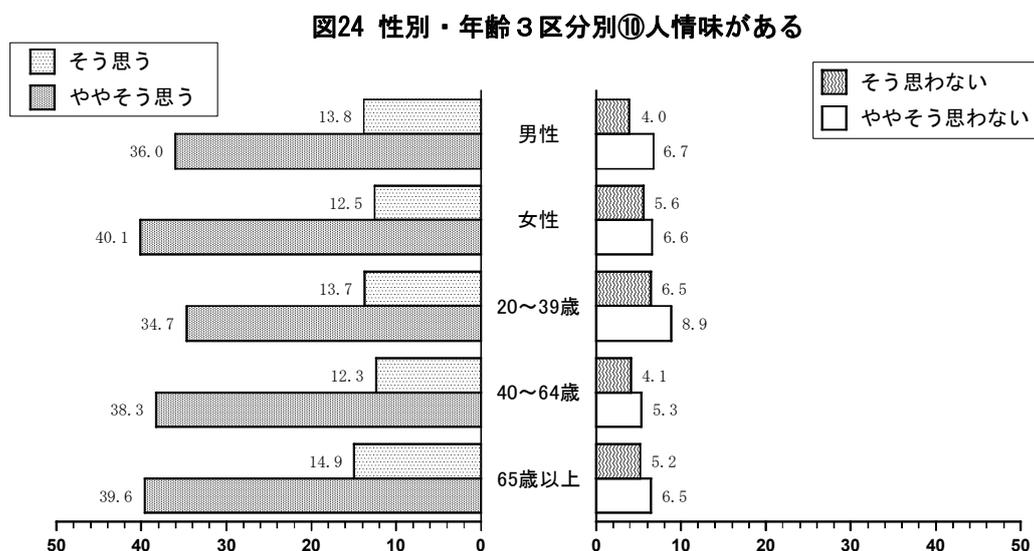
この項目も肯定より否定的回答が多いが、判断に迷う項目である。属性間でも大差がない。

図23 性別・年齢3区分別⑨教養を高め文化に接する機会が多い

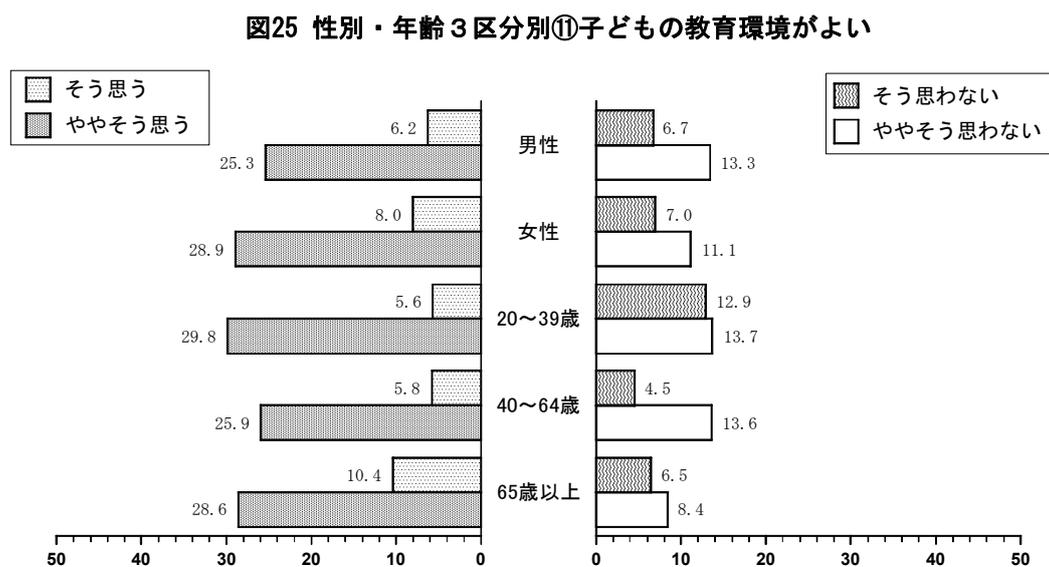


(10) 人情味がある

図 24 の通り、「そう思う」は低水準であるが、否定的回答が少なく、人情味があると思っている人が多い。属性間でも大差がない。



(11) 子どもの教育環境がよい



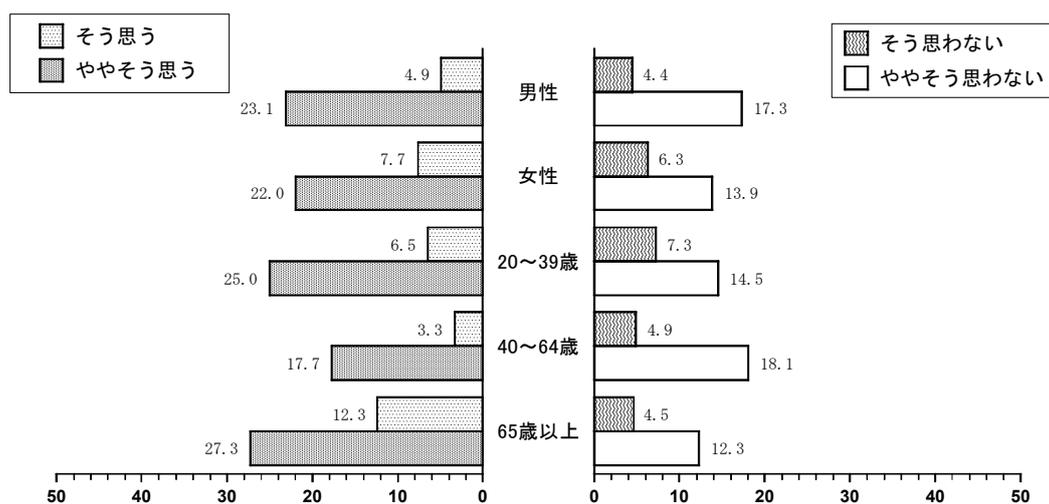
回答結果の傾向は人情味があると類似しているが、「そう思う」が低水準であり確信的に

肯定している訳ではない。属性間では、年齢が高いほど肯定的傾向がある。

(12) 人と知り合う機会、活動の場が多い

人と知り合う機会、活動の場が多いと確信している人は少ないが、否定的回答よりも肯定的回答の方が多かった。属性で比較すると、性別では大差がなく、年齢3区分別では40～64歳が肯定よりも否定の方が多く、「そう思う」「そう思わない」では20～39歳でも後者の否定の方が多かった。これら以外でも「そう思う」「そう思わない」は65歳以上を除いてかなり近い数値を示している。また、「ややそう思う」「ややそう思わない」についても同様である。年齢3区分の65歳以上のみ、肯定的回答が多いという特徴的な結果を示している。

図26 性別・年齢3区分別⑫人と知り合う機会、活動の場が多い

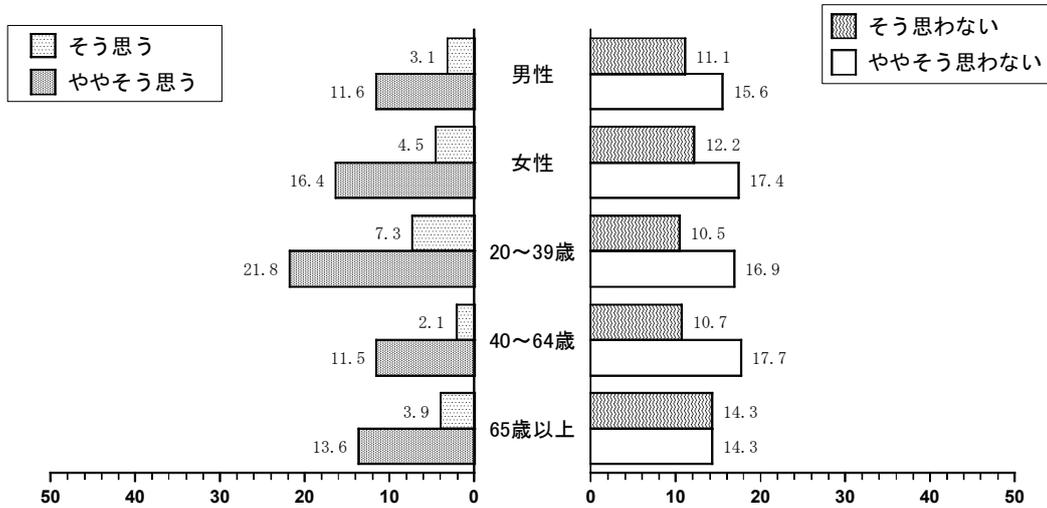


(13) きれいな男女が多い

「どちらともいえない」が5割を超えて2番目に多い項目である。そのため肯定も否定も低水準で判断に迷った人が多いことが分かる。「そう思う」「そう思わない」では性別、年齢3区分別全てで「そう思わない」の方が多く、「ややそう思う」「ややそう思わない」でも女性と20～39歳を除いて「ややそう思わない」の方が多く。

このように判断を保留した人が多いのであるが、否定的な捉え方が多いのは、比較の対象とした他都市がどこであるかにより変わると思われるが、街全体の雰囲気にも拠ると考えられる。

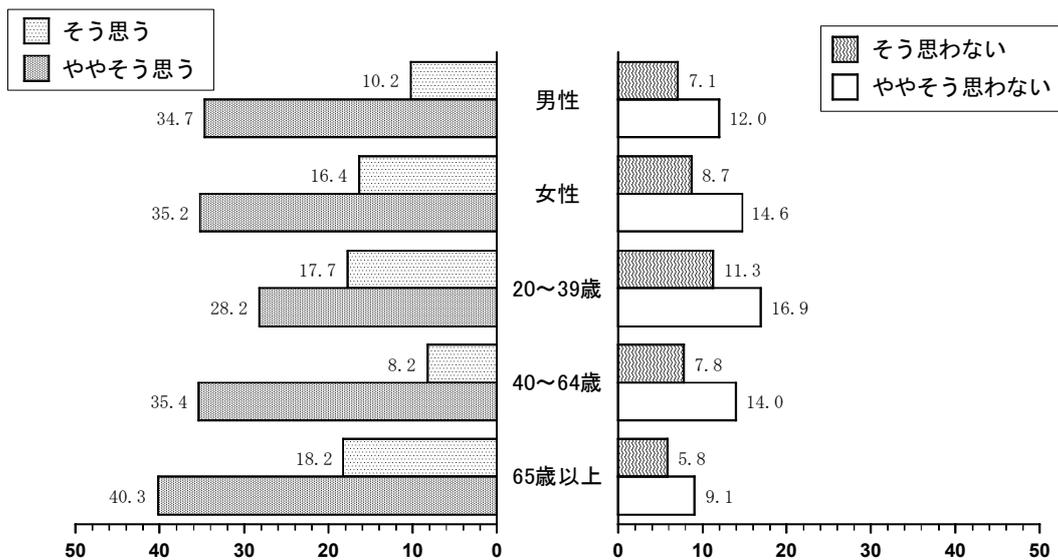
図27 性別・年齢3区分別⑬きれいな男女が多い



(14) 買物をする際、多様な商品があり、楽しめる

買物を楽しめることに関しては肯定的な捉え方が多かった。特に女性と20～39歳、65歳以上が肯定的な捉え方をしていることが分かる。

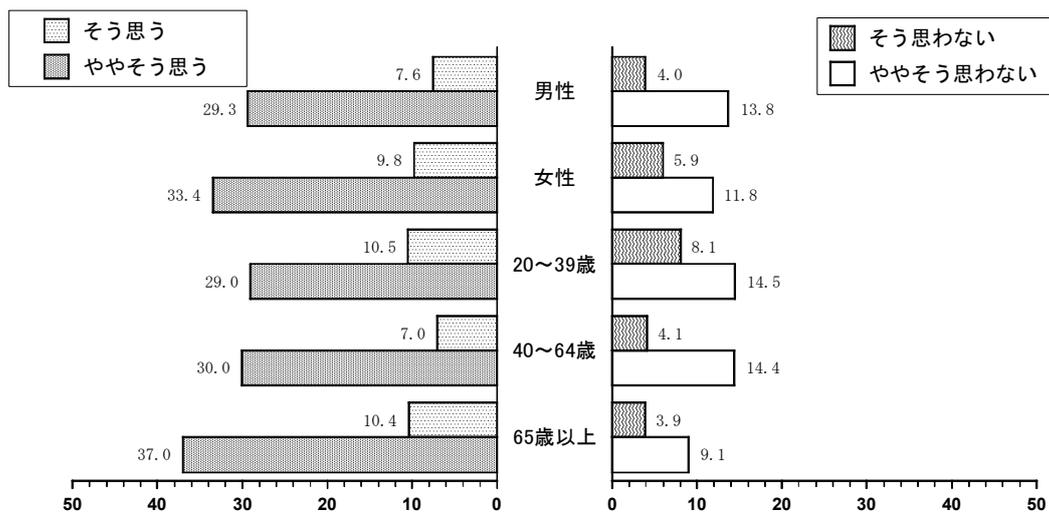
図28 性別・年齢3区分別⑭買物をする際、多様な商品があり、楽しめる



(15) 多様な情報が容易に手に入る

情報の入手に関しては、「そう思う」「そう思わない」という確信的捉え方では僅かに前者が多いが拮抗している。「ややそう思う」「ややそう思わない」では前者が大きく上回っている。この捉え方は属性間でも大差がない。

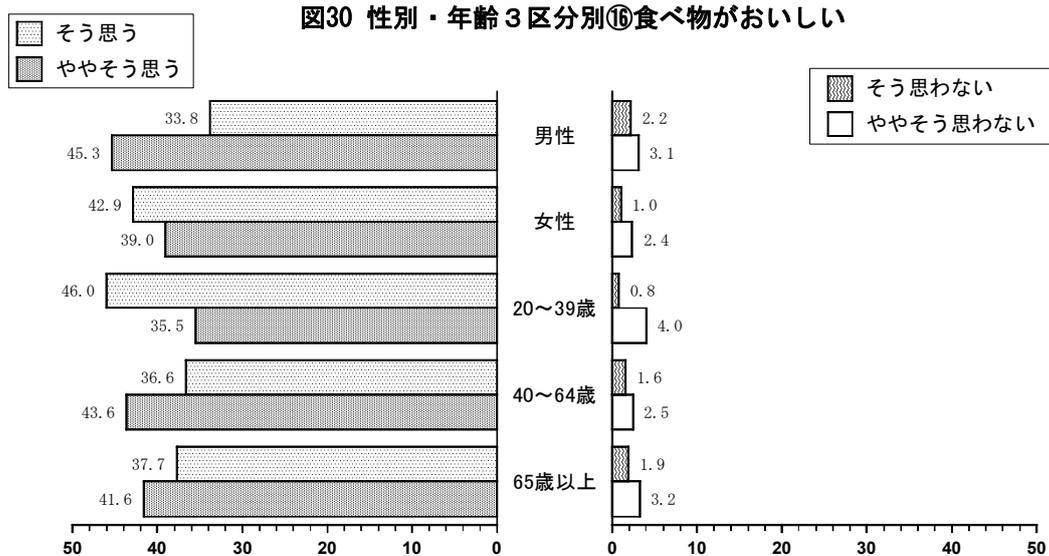
図29 性別・年齢3区分別⑮多様な情報が容易に手に入る



(16) 食べ物がおいしい

図 30 の通り、肯定する回答が顕著である。属性間でも大差がない。

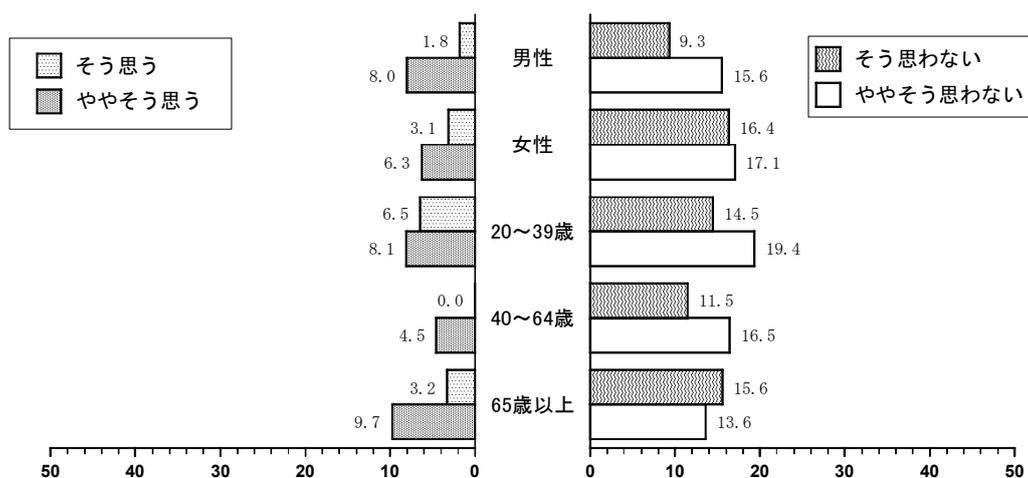
図30 性別・年齢3区分別⑯食べ物がおいしい



(17) 異性と知り合う機会が多い

この項目は「どちらともいえない」が最も多い項目である。一方、肯定・否定で比較すると、肯定的な捉え方は顕著に少なかった。

図31 性別・年齢3区分別⑰異性と知り合う機会が多い



(18) 芸術・文化施設が多い

図32 性別・年齢3区分別⑱芸術・文化施設が多い

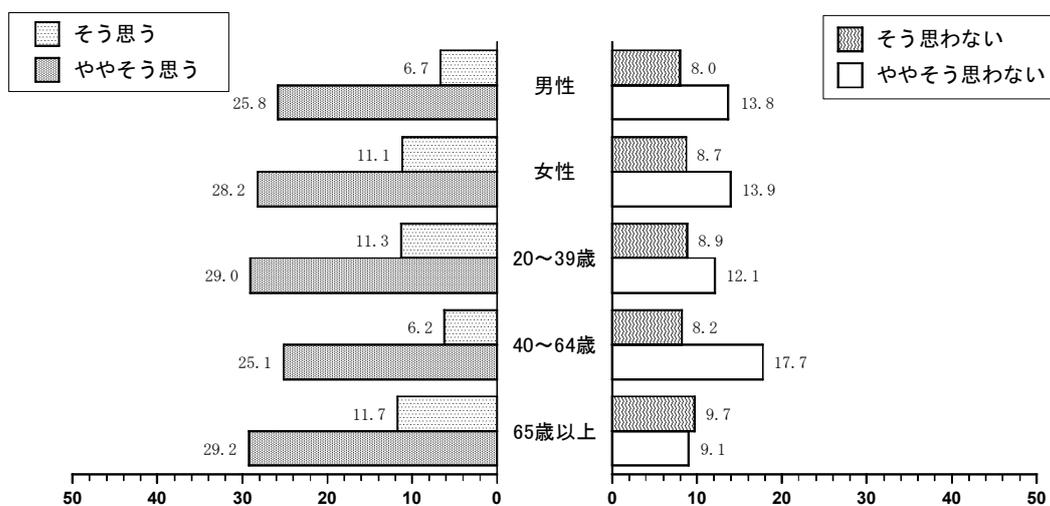


図 32 の通り、芸術・文化施設に関して「そう思う」「そう思わない」で比較すると、男性と、40～64 歳では「そう思わない」が多く、女性と 20～39 歳、65 歳以上は僅かに「そう思う」が多いが拮抗している。「ややそう思う」「ややそう思わない」では全ての属性で前者が多くなるが、40～64 歳は他の属性と比べて「ややそう思わない」と捉えている人が多い。

(19) 行政機関がよくやっている

図 33 は行政機関の捉え方である。この項目は表 4 の通り、「どちらともいえない」と態度を保留した人が 4 番目に多く、4 割以上を占めている。そのため、図 33 に示したように、「そう思う」「そう思わない」「ややそう思う」「ややそう思わない」の全てで低水準である。また、65 歳以上を除き「そう思わない」が「そう思う」を上回っている。

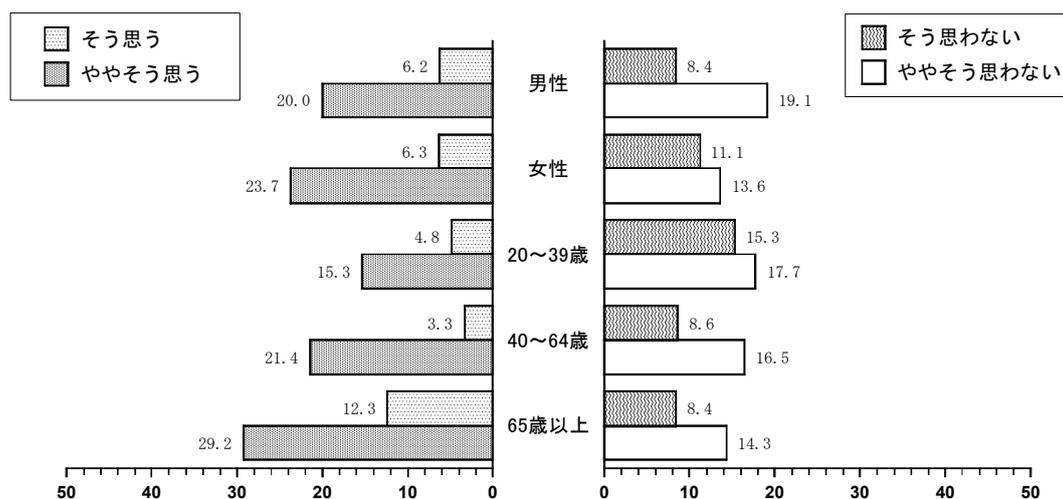
20～39 歳では「ややそう思わない」が「ややそう思う」を上回り、この年代は行政を否定的に捉えていることを示している。

男性もこれと同様の傾向を示しており、「そう思う」「そう思わない」では「そう思わない」が多く、「ややそう思う」と「ややそう思わない」は殆ど同じである。

65 歳以上のみが「そう思う」と「ややそう思う」の両方が、「そう思わない」「ややそう思わない」より多いという結果を示している。

判断に迷うが、確信的（「そう思う」「そう思わない」）回答では否定的な捉え方であった。

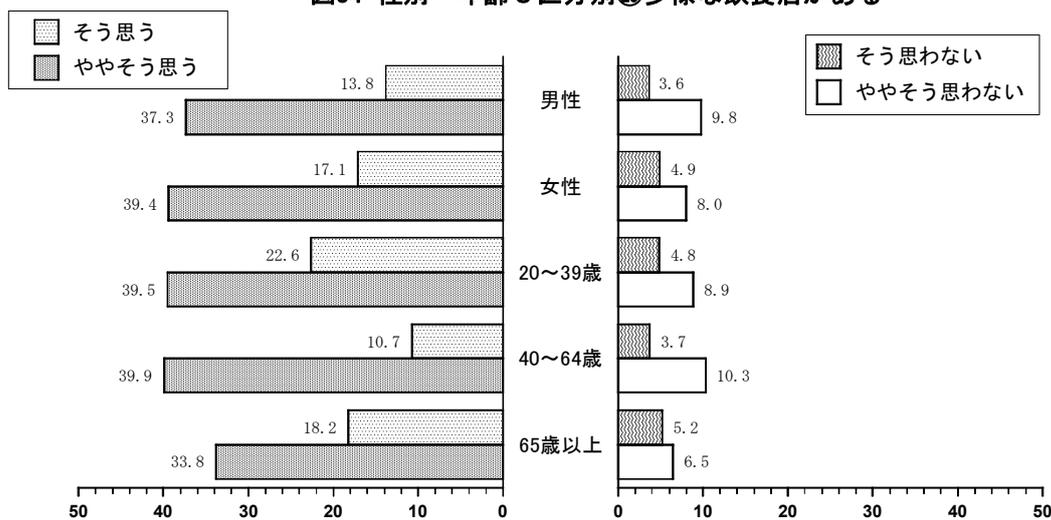
図33 性別・年齢3区分別⑱行政機関がよくやっている



(20) 多様な飲食店がある

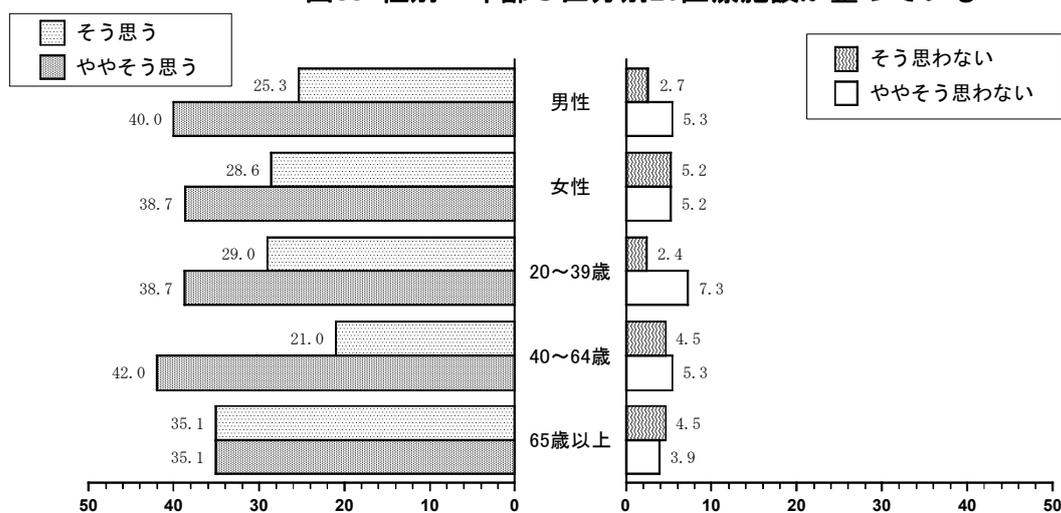
図 30 の「食べ物おいしい」と同様に、肯定的な捉え方がなされている。特に 20～39 歳は肯定的捉え方をしていることが分かる。性別では女性の方が肯定的捉え方をしている。

図34 性別・年齢3区分別⑩多様な飲食店がある



(21) 医療施設が整っている

図35 性別・年齢3区分別⑪医療施設が整っている



医療施設に関しても肯定的捉え方をしている人が多い。「食べ物がおいしい」に次いで肯定的捉え方をしているといえる。

その中で確信的（「そう思う」「そう思わない」）回答が多いのは 65 歳以上であり、少ないのは 40～64 歳である。

参考のために下に表 4 を再掲した。

表 4 他都市と比較した居住している市の捉え方（再掲）

	思う	やや思う	ちらとも いえない	やや思わ ない	思わな い
①若者が多く活気がある	2.7	12.9	35.0	①26.6	①21.1
②古いしきたりが無い	11.6	26.4	⑤40.5	15.0	5.1
③北九州市に住んでいることを自慢できる	16.2	26.2	38.4	9.7	8.6
④交通機関が便利	③26.2	⑥35.7	18.3	10.8	7.2
⑤国際都市である	5.7	18.1	39.7	④19.0	③15.6
⑥娯楽が多い	9.5	25.9	34.4	②19.8	8.2
⑦きれいな街や公園など心が休まる場がある	11.6	⑤36.5	30.2	14.8	4.9
⑧したいと思う仕事がある	8.2	15.8	36.7	③19.2	②16.9
⑨教養を高め文化に接する機会が多い	5.1	18.6	⑤40.5	⑤18.6	④14.4
⑩人情味がある	13.3	③38.0	35.6	6.5	4.9
⑪子どもの教育環境がよい	7.0	⑨27.4	③44.5	12.2	7.0
⑫人と知り合う機会、活動の場が多い	6.7	22.4	48.5	15.4	5.3
⑬きれいな男女が多い	3.8	14.4	②51.7	16.3	11.6
⑭買物をする際、多様な商品があり、楽しめる	13.3	⑦35.4	28.5	13.5	8.0
⑮多様な情報が容易に手に入る	8.7	⑧31.9	39.7	12.9	4.9
⑯食べ物がおいしい	①39.0	①41.3	13.7	3.0	1.5
⑰異性と知り合う機会が多い	2.5	6.8	①58.4	16.3	⑤13.3
⑱芸術・文化施設が多い	8.9	⑩27.2	39.5	13.7	8.7
⑲行政機関がよくやっている	6.3	22.1	④43.9	16.3	10.1
⑳多様な飲食店がある	15.6	③38.0	31.6	8.9	4.4
21 医療施設が整っている	②26.8	②39.4	23.6	5.5	4.0

IV 全体的生活満足感と市の捉え方の関連

以下では、全体的生活満足感と市の捉え方について得点化し、性別、年齢3区分別に比較するとともに、全体的生活満足感と市の捉え方の相関について検討する。

1 全体的生活満足感と市の捉え方の性別による平均値の比較

全体的生活満足感と市の捉え方に関して性別の平均値で比較したのが表6である。

表6 全体的生活満足感と市の捉え方の性別平均値

	男性		女性		p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
全体的生活満足感	3.748	1.255	3.905	0.992	
①若者が多く活気がある	2.433	1.061	2.527	1.049	
②古いしきたりがない	3.138	0.981	3.319	1.046	*
③北九州市に住んでいることを自慢できる	3.246	1.095	3.370	1.141	
④交通機関が便利	3.578	1.116	3.709	1.240	
⑤国際都市である	2.729	1.070	2.858	1.101	
⑥娯楽が多い	3.109	1.067	3.067	1.109	
⑦きれいな街や公園など心が休まる場がある	3.377	1.032	3.349	1.035	
⑧したいと思う仕事がある	2.748	1.117	2.811	1.193	
⑨教養を高め文化に接する機会が多い	2.734	1.023	2.870	1.102	
⑩人情味がある	3.493	0.953	3.484	0.993	
⑪子どもの教育環境がよい	3.112	0.948	3.204	0.995	
⑫人と知り合う機会、活動の場が多い	3.067	0.883	3.111	0.965	
⑬きれいな男女が多い	2.798	0.900	2.832	1.006	
⑭買物をする際、多様な商品があり、楽しめる	3.290	1.042	3.365	1.183	
⑮多様な情報が容易に手に入る	3.229	0.924	3.299	1.009	
⑯食べ物がおいしい	4.058	0.904	4.228	0.844	*
⑰異性と知り合う機会が多い	2.771	0.798	2.614	0.951	*
⑱芸術・文化施設が多い	3.095	0.995	3.195	1.097	
⑲行政機関がよくやっている	2.964	0.995	3.004	1.043	
⑳多様な飲食店がある	3.482	0.970	3.569	1.030	
㉑医療施設が整っている	3.804	0.969	3.807	1.075	

表中の*はT検定の結果、5%水準で有意を表す。

平均値の算出は、全体的生活満足感と市の捉え方を得点化して行った。市の捉え方の得点化の方法は上述したが、全体的生活満足感もこれと同様に「満足している」「どちらかといえば満足している」「どちともいえない」「どちらかといえば不満である」「不満である」を順に5、4、3、2、1と配点した。得点の最大値は5、最小値は1である。

表6に示した平均値の中で、性別間で有意な差が認められたのは、②古いしきたりが無い、⑩食べ物がおいしい、⑪異性と知り合う機会が多い、である。これらは性別間で市の捉え方に差があることを示している。

2 全体的生活満足感と市の捉え方の年齢区分による平均値の比較

表7は全体的生活満足感と市の捉え方の年齢3区分別平均値の比較（分散分析）により有意差が認められた項目のみ示している。この結果によると「若者が多く活気がある」を除く5項目で、65歳以上と他の年齢区分の間に平均値に差が認められた。

表7 全体的生活満足感と市の捉え方の年齢3区分別平均値

	年齢3区分別	度数	平均値	標準偏差	多重比較	p
①若者が多く活気がある	20～39歳	122	2.76	1.114	>40～64歳	*
	40～64歳	240	2.39	.983		
	65歳以上	151	2.42	1.080		
③北九州市に住んでいることを自慢できる	20～39歳	122	3.07	1.197	<65歳以上	**
	40～64歳	242	3.27	1.010		
	65歳以上	152	3.58	1.177		
⑧したいと思う仕事がある	20～39歳	123	3.07	1.132	>65歳以上	**
	40～64歳	241	2.86	1.094	>65歳以上	**
	65歳以上	141	2.40	1.212		
⑫人と知り合う機会、活動の場が多い	20～39歳	122	3.09	.979	<65歳以上	**
	40～64歳	240	2.96	.835		
	65歳以上	150	3.31	1.004		
⑭買物をする際、多様な商品があり、楽しめる	20～39歳	123	3.24	1.257	<65歳以上	*
	40～64歳	241	3.22	1.049		
	65歳以上	150	3.57	1.083		
⑰行政機関がよくやっている	20～39歳	123	2.76	1.049	<65歳以上	**
	40～64歳	241	2.94	.929	<65歳以上	*
	65歳以上	150	3.23	1.120		

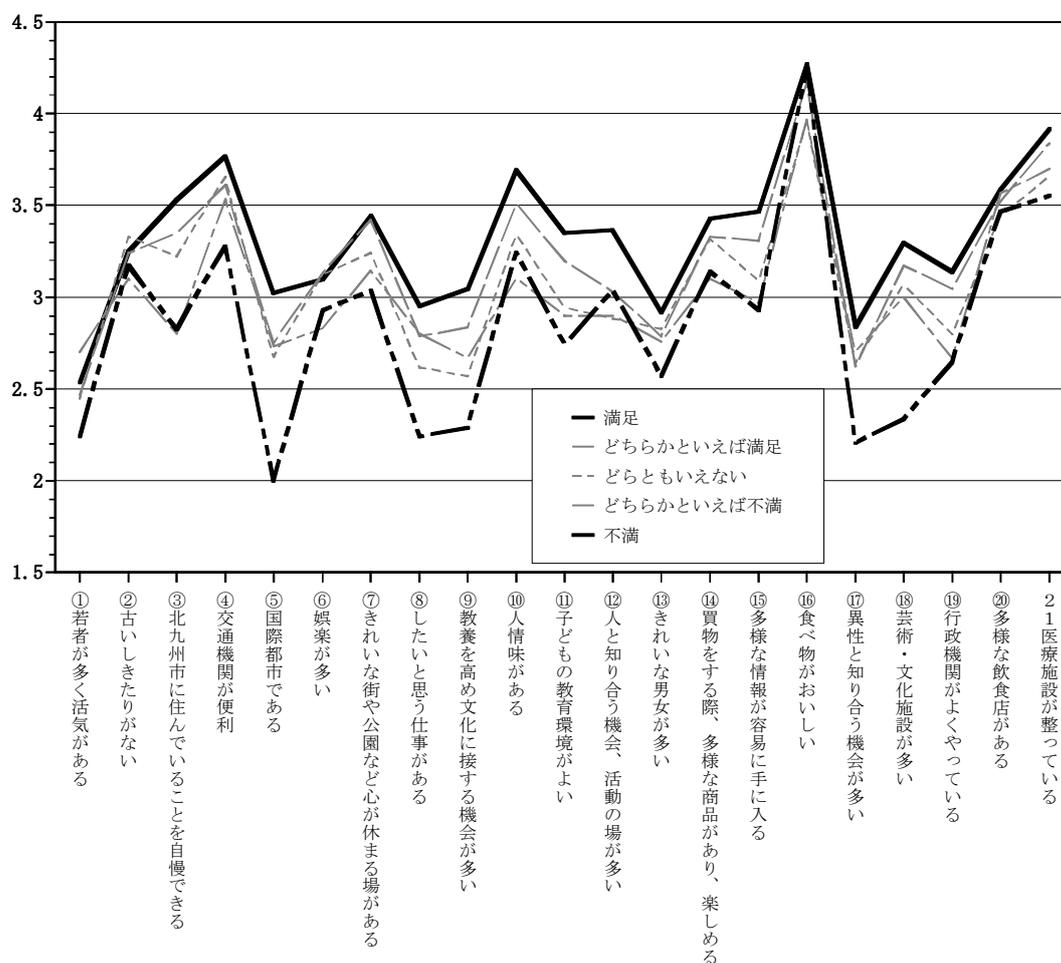
表中の*はF検定の結果、5%水準で有意を表す。**はF検定の結果、1%水準で有意を表す。

表中の>、<は平均値の大小を表す。

3 全体的生活満足感と市の捉え方の関連性

全体的生活満足感と市の捉え方の関連では、前述と同様の方法で得点化した市の捉え方を全体的生活満足感別に平均値で図示したのが図36である。これによると、全体的生活満足感が「満足」の方が「不満」に比べて平均値が高いことが分かる。

図36 全生活満足感別に見た市の捉え方の平均値



この関連性を相関係数で示したのが表8である。この結果、全体的生活満足感と市の捉え方の項目の間で弱い相関を示すのは「⑪子どもの教育環境がよい」のみであり、他の20項目に相関は認められなかった。つまり、①～㉑の項目は全体的生活満足感とは結びつか

ず、全体的生活満足感は他の要因と関連性があることを示唆している。このことは「⑧したいと思う仕事がある」等の賃金や雇用、「④交通機関が便利」「⑤国際都市である」等の利便性や都市の位置づけ、「⑨教養を高め文化に接する機会が多い」「⑮多様な情報が容易に手に入る」等の教養・文化や情報、「⑯食べ物がおいしい」「⑭買物をする際、多様な商品があり、楽しめる」「㉑医療施設が整っている」等の食べ物や買物、医療施設とは別の要因が全体的生活満足感を左右することを示唆している。

表8 全体的生活満足感と市の捉え方の相関係数

	全体的生活満足感
全体的生活満足感	1.000
①若者が多く活気がある	0.036
②古いしきたりがない	0.027
③北九州市に住んでいることを自慢できる	0.186
④交通機関が便利	0.110
⑤国際都市である	0.170
⑥娯楽が多い	0.036
⑦きれいな街や公園など心が休まる場がある	0.115
⑧したいと思う仕事がある	0.152
⑨教養を高め文化に接する機会が多い	0.174
⑩人情味がある	0.175
⑪子どもの教育環境がよい	0.213
⑫人と知り合う機会、活動の場が多い	0.160
⑬きれいな男女が多い	0.097
⑭買物をする際、多様な商品があり、楽しめる	0.094
⑮多様な情報が容易に手に入る	0.181
⑯食べ物がおいしい	0.101
⑰異性と知り合う機会が多い	0.145
⑱芸術・文化施設が多い	0.186
⑲行政機関がよくやっている	0.149
⑳多様な飲食店がある	0.053
㉑医療施設が整っている	0.096

まとめ

ここまで、生活意識の中核として「全体的生活満足感」を位置づけ、それに関連する要因として「居住する環境の捉え方(市の捉え方)」を設定して調査結果に基づいて検討した。

調査への回答者の属性が、年齢構成では60歳代が多く、ライフステージ(卒業、就職、結婚、出産、子育て期、介護期、高年齢期等により区分)として区分した年齢3区分では40～64歳が最も多かったことや、回答者の年齢構成を反映した世帯構成では「夫婦のみ家族」が3割以上を占めていた。同様に就業形態は「仕事をしていない」人が3割以上であり、二番目多い「正社員・正規職員」は4分の1、三番目に多いのが「パート・アルバイトなど」であり、回答者の年齢の高さを反映した基本属性が結果に反映していると見ることができる。

このような基本属性の全体的生活満足感が高く、「満足している」「どちらかといえば満足している」の両方で6割を超えた。居住年数が「10年以上」の人が5割を超え、「生まれてからずっと」の地着き者を含めると、長期居住者が9割近くを占めていることから、現在居住する場所に住み続けたい人は7割以上である。

社会的背景として、不況が続き、賃金の低下や就業条件の変化があるにもかかわらず、全体的生活満足感は低いわけではない。居住している場所での居住継続意向も高く、住みにくい点も教育環境、人間関係、騒音などに多少の住みにくさを感じている人は存在するが、活気のなさを除くと大きな生活の問題はないと感じている人は多い。

活気のなさは高齢化の進行によるのではなく、量販店の郊外への進出による生活の郊外化が進み、中心市街地や商店街の衰退から感じていることであると推測できる。市の捉え方は「活気がない(若者が少ない)」であるが、食べ物がおいしい、医療施設が整っている、交通機関が便利、多様な飲食店がある反面、仕事面では「したいと思う仕事がない」「教養文化面での接する機会が少ない」「異性と知り合う機会が少ない」という否定的捉え方もある。このようなことから、全体的な生活満足度は高いが、仕事、教養文化、異性と知り合う機会は不十分であり、近隣の政令市で補うということかもしれない。

一方、全体的生活満足感で、満足が低い傾向を示しているのは「ひとり暮らし」「親世代との二世帯家族」「親・子・孫の三世帯家族」である。また、「一戸建て借家」「公営(公団住宅、市営住宅など)の借家」でも満足度が低く、不満が他の住宅形態に比べて多かった。

相対的には居住年数が長い方が全体的生活満足感が高いが、居住年数が長い人は高年齢者に多く、一般的に高年齢者の全体的生活満足感が高いことを反映しているとも見てとれる。その高年齢者は他の年代と異なる居住環境の捉え方(市の捉え方)をしていることを表7が示唆している。

繰り返しになるが、市の捉え方は仕事面、教養文化面、異性と知り合う機会、活気などに欠けるという捉え方であるが、高年齢者の全体的生活満足感が高く、結果的に「仕事をしていない」人や「持ち家」の人の生活満足感が高くなっている。逆に「借家」「家が狭い」「労働時間が長い」「家賃が高い」など、生活の場や生活を支える基本的側面に生活しにく

さを感じている人の満足感が低い。

また、市の捉え方で「そう思う」と確信的に回答した人が多いのは⑩食べ物がおいしい、⑫医療施設が整っている、④交通機関が便利の3項目であり、その中でも⑩食べ物がおいしいは4割近くの人が肯定している。逆に、「そう思わない」と否定した捉え方の上位は、①若者が多く活気がある、⑧したいと思う仕事がある、⑤国際都市である、⑨教養を高め文化に接する機会が多い、⑰異性と知り合う機会が多いであり、残りの12項目が判断に迷う人が最も多い項目であった。この捉え方も、図36の通り、全体的生活満足感が低い人は全体的に否定的捉え方をしている。しかし、市の捉え方として示した21項目の間では高い相関が認められたにもかかわらず(表等で結果を示していない)、生活意識に影響が強いとされる「したい仕事」も含めて市の捉え方と全体的生活満足感との間に相関は殆ど認められなかった(表8)。

そのため、居住環境の把握の仕方は全体的生活満足感と関連性がないとはいきれないが、全体的生活満足感と関連性が強い別の要素の存在を探ることが今後の課題として残った。この時点で考えられる一つの要素は人間関係である。近隣の人との人間関係、職場の人間関係、集団での位置づけと本人の認知スタイル等々が要素の一つとして考えられる。

【参考文献】

青井和夫・松原治郎・副田義也「生活構造の理論」有斐閣双書、1971

島田一男監修、瀧本孝雄、鈴木乙史編集「近隣地域の人間関係」ブレーン出版、1988

平成17～20年版「国民生活白書」内閣府